

# 犬神ギフト

巳影樹生

## プロローグ

うっすらと光がにじむ、視界一杯に敷き詰められた綿のような曇り空の下。  
冷たい冬の風に吹かれながら、冷たく固いコンクリの上で仰向けで――  
自分の上に乗っているものを見る。

それは光を背に受けて真鍮色に輝く波打つ長い髪で、白いコートのような服はゆったりと、その胸のボールのような膨らみは、コート越しでもわかるほど大きく、手に収まりきらない。

胸が大きいからといって太ましいというわけでは無い事を、俺の手を包み撫でている両手の細い指から判る。

その体つきと重みからして、オトナな女性ではなく、女の子でもなく、また幼女でも老女でもない。ましてや鳩胸の男でもなく、男の娘でもなく……この手から伝わる柔らかな感触は、女の娘のものだ。

霞む目を凝らして、その姿を見る。

その頭には動物の耳が生えていて、その背後でふさふさとしたしっぽが左右に大きく揺れている。

その獣の耳としっぽらしきものの生えた女の娘は、俺の上でこう言った。

「ご主人様のご恩に報いるべく、犬神になって帰って参りました！ご主人様の望みを、なんなりと申しつけ下さい」

「私が全力で報います！」

ほわほわした柔らかな笑顔で主人の命令を待つ犬のように、宝石のように鮮やかな緑色の瞳が期待を秘めた眼差しでまっすぐにこちらを見つめてくる。俺の体の上にもたがったままで。

非現実的な光景と、体を刺す冬の風。

冷たく固いコンクリートと、暖かく柔らかい指と体の重み。

左手を絡まる指をほどいて床に下ろし、まぶたを閉じて思う……

俺は……微乳派だ。

どうしてこんなことになっているのか――

そう、気が付くと真っ暗闇の中だった。

夢の中なのか、それとも起きているのか、ただ意識だけが冴えていて。

音も無く、感覚も無く、体はふわふわと宙に浮いているかのようだ。

寝ている途中で目が覚めてしまったのだろうか。

落ち着かないので枕に伏せようと寝返りを打とうと思ったら、体は動かない。というか体の感覚が無い。

手を動かして自分の体を触ろうとしても、出来ない。

そもそも、体が動いているのかいないのかも、感覚がないので判らない。

体が動いて自分の体を触ることが出来ているとしても、感覚が無くて分からないのか、そもそも動いていないのか

声を出してみようにも声が出ない。

出ているのかどうか分からない。

口が動いているのか感覚がないので分からない。

舌が動いているのか、顎が動いているのか、歯が噛み合っているのか分からない。

自分の声も聞こえない。声だけでなく何も聞こえない。

耳栓したり音の無い場所にいると、テレビの砂嵐のような音や、自分の心臓の音とか聞こえるものだけれど、何も聞こえてきやしない……

目を開ければてっとり早いんじゃないか、何故今まで目を開けようとしなかったのか。

……けれど、目を開ける事をためらってしまう。

服の上からぶついたり切ったりして、痛みが続いている時とか、その傷口がどうなっているのか見たくない時のような、そんな感覚で。

気づいてしまうのが怖い――

というわけで、このまま考えていても怖い考えしか浮かばないので、再び寝直す事にしたのだった。

――眠れない。

眠れない、そして何も無い事に飽きた。

時間が過ぎているのか居ないのかわからない。けれど飽きた事だけはわかる。

意を決して、目を開けてみる事にする。

……目って意識して開く事があまりないけれど、これで開いているのか開けていないのか、変わる事の無い闇の中で考える。

まだ夢の中なんじゃないか？

そんなことを考えてみたが、こうして夢の中だと考えられるのだから夢の中じゃないだろう。

こうして疑問を感じる事ができるのだから、頭だけが動いているのがわかる。

夢の中なら考えごととはできないからな。

……とはいえ、何も出来ない真っ暗闇の中で考えごとがあるわけでも無く、何も思い浮かばない。ただ飽きたという感覚だけがある。

体の感覚が無いため、自分が本当に寝ているのかもわからない。

ひょっとしたら、本当に体が浮いているんじゃないかと錯覚するような感覚。

どちらが上でどちらが下か、見えているのはまぶたの裏か、それともこれが表の光景なのか。

夢か現実かも区別のつかない、そんな宙ぶらりんになっているかのような状態で、意識はずっと冴えたまま、何も出来ずに闇の中。

こうして何もしないまま時間が過ぎていく感覚が、飽きるを乗り越えて苦痛になってきた。

これは悪夢か？

——そういえば。

何か、嫌な夢を見ていた気がする。

……なんとなくだけど。

そんな気がする。

……なんだっけ？

思い出せない事にモヤモヤしていると、何か体が重くなってくる。なにかが体の上に何かに乗っているような感覚がある。

息苦しくて、重くて、動けない……これはもしかして……

霊の仕業！？

なんて一人ボケてもしょうがない。霊なんて居もしないものを相手にしても仕方がない。

霊だの悪魔だの神様だの、そんなものは居ない。

絶対に居ない。

……ひょっとして、これは金縛りという奴だろうか。

金縛りというのは目が覚めても体を動かすために必要な部分が眠っているために体が動かない現象とかどこかでみたような。

なるほど、これなら起きているはずなのに寝ていて、寝ているはずなのに起きている感覚の正体にも説明がつく。

金縛りというやつは放っておけば治るとどこかで見たはずなので、ただ待つ事にした。

金縛りのまま居続ける事にも飽きてきた――

いつか解けるはずの金縛り。原因さえわかれば怖くも無い。

といっても何もしないで居ることは変わらず、ただ暗闇に居たときより、圧迫感がある分不快だ。

けれど、金縛りじゃあ何もできないので、ただ耐えるしかない。

こうして息苦しい闇の中で時を過ごしていると、いろいろとイヤな考えが浮かんでくる。

もしかして、自分はすでに死んでいて、ここは死後の世界じゃないか。

……まあそれならそれでいいか。特にやりたいことも……思いつかないし。

このまま眠くなって消えて無くなるなら、それでいいや。

……けど、もしこのままだとしたら？

この息苦しい何もない暗闇の中で、体の感覚も無く、冴えた意識のままずっと過ごす事になったら？

そう、この暗闇で目を開ける事が出来ず、体も動かない状況が……

もしかして、生き埋めになっているんじゃないか。

真っ暗なトンネルか何かで、土砂に埋まってしまって、身動きがとれないでいるとか。

事故か何かで植物状態になって、ベッドの上に繋がれているとか。

そうして自分は寿命が来て死ぬまで、重苦しい思いをしながら暗闇の中でゆっくり死んで行かなければならないのか！？

体の感覚が無いのに、胸を締め付けられるような感覚が襲ってくる。

ただ死ぬならそれでもいい。苦痛は消えて無くなるのだから。

けれど、生きているのに繋がれたまま死んでいくなんてイヤだ！

それじゃあ生きている意味も無く、苦しい思いをする意味が無いじゃないか！

まるで動けないで居る自分の体の上に、ゆっくりと砂が積もっていくように。

それとも既に死んでいて、何も無い世界がここなのか。

このまま何も無い世界で、ただ無意味に居続けるのか。

ざらざらとした恐怖に埋められていく。

それは地獄って奴じゃないのか！？

始まる事も終わることも無く、ただ意識だけがあって、何も出来ずに居続ける。

そんなのはイヤだ！

それじゃあこうして悩んだり、痛い思いを、苦しい思いをしてきた意味が何も無いじゃないか！！

今まで生きてきて、俺がこんな地獄に墮ちるような事をしたって言うのか！

ぺろ

ん？

ぺろ ぺろ

うひゃあ！？

ぬるぬるとしたものが首筋をなぞっている。

……何かが首筋を舐めている？

舐められているという感覚がある。そしてそれが首筋だとわかる！

自分以外の何かがいて、それが俺を舐めているのだから！

自分は死んでいるわけじゃない！この感覚は自分の首に暖かい舌が、触れ、唾液の跡を残しながら這っていく、この感触は体があるからわかるものだからだ！

しかし、一体何が俺の首筋を舐めているんだ……

ひょっとして何か動物が俺を食べようと舐めているのだとしたら……

と、考えていたら体の上に熱を感じる。

これは体の上に乗っている重みの正体、ということは――何かが俺の上に乗って、首筋を舐めている？

動物のようにそれは首筋をひたすらペロペロと舐めている。

噛みついてくるという感じはない。むしろ好意をもって舐めてくるような、そんな気配で――

これは動物なのか、それとも……

「ご……」

ご？

「ごしゅ……」

ごしゅッ……

「ごしゅじん……さま」

ご主人様……だと！？

「ご主人様――」

ご主人様という言葉……そして何かが首筋を舐める感覚……これはもしかして！  
いま俺の置かれている状況は、  
『目が覚めたけど金縛り中で、朝なのに起きてこない俺を、かわいい女の娘が俺の上に跨って俺の首筋をペロペロして起こそうとしている』  
ということか！？

なんて理想的なシチュエーションだ！

『ご主人様』という言葉は普通の相手には使わない言葉、普通の友達や彼女であっても使いはしない！

それに『舐めて起こす』という行為ッ！これは自分の口で相手に何かをするという事ッ！！

相手の肌を舐めるというのはよほどの親密さが無ければ行えない行為、もしくは強制がなければできない事だ！

それを『ご主人様』と呼びながら『舌で舐めて起こそうする』ということは、俺に対してご奉仕するだけの好意や従ってくれる意志を持つという事ッ！！

それを俺の体の上に乗って行っているのだから好意や仕事を越えた愛情を持っているという事ッ！！

そんな娘がかわいくないわけがないじゃないか！

きっと俺の上に乗って起きない俺に対して、舐める以外にもいろいろな事をしているに違いない！俺の感覚が無い首から下ではもっとスゴいことになっているに違いない！！

たとえなっていないなくてもこれから起こるに違いない！！！！

……こんな都合のいい状況、夢かもしれない。悪夢から良い夢に変わっただけかもしれない。

けれど、これが夢だろうと現実だろうとどうでもいい！

夢でも幻でも、俺を求めてくれる娘が居るなら、それが俺にとっての現実だッ！

だったら、この理想的な夢を手にするだけだ！！

金縛りにあってようが、植物状態でベッドに繋がれていようが！

今すぐ起きあがってこの手に掴むッ！全力で！全力で起きて、このに掴まなければ

！



か細い体で俺の上にまたがってペロペロ舐めて起こそうとしている！

俺が起きあがる事を待ち望んでいる娘のためにも！俺は全身全霊を以ておっきしてやるんだッ！！！！

頭に血が通っている感覚が伝わってくる！冴えている自分の頭が、流れてくる血潮が！

頭が首に繋がっていて、血が首から流れてきているッ！

そして体の重みが、感じられる、俺の上に乗っている女の娘の重みもだ！

頭が動いて！首から感触が伝わって！胸や腹で重みを感じるなら！

俺の体はここに在るッ！

首から背中ッ！背中から胸ッ！肩ッ！腰ッ！胴体から手足にッ！全身に血がみなぎってくるものがわかるッ！！

動けッ俺の腕ッ！動けッ、俺のまぶたッ！！

今こそ目を開きッ！手を伸ばし！！おっきして、理想の女の子をこの手に掴むんだ！

俺にご奉仕してくれる、かわいくて控えめな女の娘を！！！！

うおっ、まぶし！

まぶたを開いた事で流れ込んできた目を刺す光に、思わず両目を閉じる！

手で光を遮ろうにも、まだ手が痺れていて動かないため反射的にまぶたを閉じてしまった。

そんな閉じた目に、まぶたを透かして陽の光が、白いスクリーンに映し出される映像のように、赤や青や緑の光の粒を描いている。

なんてこった、理想を目の前にしながらも、目を開けられないだなんて！

くやしさともどかしさに、まぶたをピーナッツが砕けるくらいに噛みしめながら、まぶた越しの光を見つめ慣らしていく。

すると、真っ白なスクリーンに、うっすらとした影が動いている。

その影が動くたびに、首筋にぬらぬらとした熱いものが這う。

「……ご主人様……」

そのかわいらしい声に、首筋を舐め上げる感触に、意識を集中させる。

首筋を這う舌の感触、唾液でぬめる熱い舌の感触、首筋を、喉を、胸を這っている舌とたまに触れる唇の感触ッ~~~~！！

クソッ、いま俺のすぐそばで！俺の上で！！俺の理想的なシチュエーションが繰り広げられているというのに！！

まぶしさに負けて目を開くことができないなんてッ！！

けれど、だんだんと目が覚めてきて感覚が戻っていくのがわかる。これは夢では無く現実なのだ！

自分の体の感覚、重みだけでなく、上に乗っている娘の体温や、その柔らかい体の感触も、体の上を這う髪の毛の感触もッ！

今の俺には、この薄いまぶたの外で行われていることを、感触から想像するしかできない！

しかし、瞼を開けば現実のモノになる！！手を伸ばせば掴みとる事が出来る！！

この理想を目にして！掴みとるためにッ！！開けッ！俺の目ッ！！動け！俺の腕ッ！！

すぐ側にある、俺の理想を！真実を！！この手に掴むん～～

だああああああああああああああああああ！！！！

気合いと共にまぶたを開く！

突き刺すような光が目の中に赤や青や緑の濁流となって流れ込んでくる！

それでも俺は、自分を起こそうとしている娘をこの目見るためにも！

反射的に閉じようとする瞼をこじ開けてでも見るッ——

——目の中を渦巻いていた赤青緑の光の粒は、視界の外に沈んでいき、視界には白一色が残った。

それはまぶしい白、白を通り越して金色に輝いて見えるもの。

金色って色かはわからないけれど、それが輝いている事がわかる。

光に慣れてきた目に映るのは、ところどころ灰色と金色。

目を凝らすと、それが敷き詰められた綿のように広がる鉛色の空と、その切れ間からにじむ光だとわかった。

現実でありそうで、夢の中のような、非現実的な風景。

その雲の隙間から射す光に照らされながら、視界の端で金色に輝くなにかが視界の

端で揺れている。

金色というほどに金色ではない、しいていうなら五百円玉のような、金っぽい色、真鍮色（ブロンド）という色なのか、雲の隙間から射す陽の光に照らされた髪は、青と緑の虹を作りながら、金色に鈍く輝いている

この娘が……俺の理想の女の娘……

冷たい風が顔を撫で――

暖かな温もりが胸を撫でる――

冷えた首筋を、熱くぬめる舌が舐め上げ、濡れた肌が、風で乾く。

「ご主人様……」

泣きそうな声で俺を呼ぶ。

そのかわいらしい声色の主を見ようとしても、痺れる首が動かない

眼だけを下に向けても、自分の頬が邪魔で顔までは見えない。

視界の下で揺れる、真鍮色の髪だけが見える。

この娘のご奉仕に答えるためにも……手を伸ばす――

右腕は感覚が無い。

自分の腕を枕にして寝たかのように、自分の体にハムでも繋がっているかのように動かない。

左腕は痺れている。

自分の腕を枕にして寝て、起きて、動かそうとして、血が流れて、腕の中をピリピリと、TVの放送終了の時の砂嵐が腕に詰まっているような感覚。

そんな砂の詰まったような腕の感覚を、腕の中を視るように探る。

……左手の指は……動く！

左手の指が曲がり、硬い地面をなぞる感覚が伝わってくる。

よし、動くぞ！

頭から左手の指先へ、そこに繋がる道を探る。

この腕さえ動けば、俺は理想の娘をこの手に掴む事が出来るんだ……

頭から首、首から肩、肩から左腕、左腕から左手へ――

自分の体の中を占めている痺れという砂嵐の中にある道を探り、辿る。

しびれる腕は、砂に埋まった道どころではなくさながら砂漠のようで、砂を掘るかのように流れ込んでくるしびれをかき分けながら進む。

掘っては崩れて痺れ、掘っては崩れて痺れ、自分の腕を動かすだけなのに、道を進むどころか砂山の中を掘り進むかのようで――

二の腕が跳ね、冷たい地面に触れた感覚がある。

もうちょいこっちか？

腕を伸ばす。いままで何気なくしてきた自分が腕を伸ばすという行為が、どれだけ大変な事なのか思い知らされる。自分が延ばそうとしている腕はどのようにできているのか、ただ腕を動かすだけでも、それは胸や背中や腰や足に繋がっていて、腕を動かすためには、それを支えるための力も必要になる。

ただ腕を伸ばすだけなのに、こんなにも難しいなんてな。

体中の意識の道を辿り、血を通わせていく。

落ち着いてやればいい。意識すれば、動く！

思い通りにならないものはない、意識してやれば、それは動く。

肩が動かすために、背中と胸が繋がりに動き、二の腕へと血が通っていき、腕が次第に上がっていく感覚が伝わってくる。

よし、動く！動くぞ！！

伸ばした腕を、柔らかな糸の束、髪の毛が滑り落ちる。すくい上げるように伸ばした手のひらには一束の髪の毛がかかっている。

これが、女の娘の髪……

空に掲げるように、すくい上げた手のひらにかかっていた髪の毛は、するりと手のひらから滑り落ちた。

伸ばした手は空になり、探る腕は冷たい空を切る。

居ない？ そうだ、この娘は、俺の上に居るんだった。

なら、手を曲げて、俺を舐めて起こそうとしている娘の頭を、撫でてあげなきゃな。

自分の胸の上にいる娘に触れようと腕を曲げようとしても、腕は内側には曲がらない。。

そのまま、自分の胸の上に手を伸ばすべく、左腕を曲げる。

腕を伸ばしたままだと曲がらない。なにかが違う。

肘がひっかかり、腕が胸側に曲がらない……

普段自分はどのようにして肘を曲げているのか、腕を胸の側に曲げようとして、肩が上がり、二の腕が外に張る。

曲げようとした腕がねじれる。ということは……

すくい上げるように伸ばした腕を、内向きにねじり、撫でるように手のひらを返す

。

返したその腕は、自然に肘から曲がり、自分の胸の上へと落ちていく。

そう、撫でるためには、手を伏せなきゃな。

これで、自分の上に居る娘に手が届く！

二の腕から力が抜け、落ちるように手のひらを胸に降ろしていく。

と、冷たい何かに触れた。俺の胸だ。

あれ？何処だ？

と、戸惑っていると、その左手は暖かく、柔らかな何かに包まれた。

それは手のひらを覆い、指の間に滑りこみ、絡みついて、そっと包み込むと、暖かく柔らかな物で受け止めてくれた。

俺の手をとって、くれた……

血が通っていき痺れる手のひらからは、その心地よい感触があふれ出し、腕の中を流れ体の中に注ぎ込まれていく。

全身に血が通い、両足も右腕も感覚を取り戻している。

流れる空気を感じ、自分の体の重みを、自分の上に居る娘の感覚が伝わってくる。

俺の手を、優しく包み込んでくれている娘を見るためにも、俺は起きなきゃならない。

痺れる首に力を入れ、頭をもちあげる。

これが……俺を舐めて起こそうとしてくれていた……

冴えた目で、自分の上に乗っている輝くものを見る。

俺の理想の……

逆光に照らされたその人影は、金色に輝いている。

女の娘――

「おはようございます、ごしゅじんさま！」

今はっきりと、俺の上に乗っているモノの姿が見える。

真鍮色の長い波打つ髪は風で揺れ、深い緑の瞳は宝石のようで、真っ直ぐにこちらを見つけていて。

幼さを残した可愛らしい微笑みを浮かべている。

身につけている白地のダブルブレストのコートは首元や胸元の赤いベルトが特徴的で、肩と袖を繋ぐ部分と脇腹の赤が白地に映える。

そのコートに包まれた胸の膨らみは手で支えられ、その手は両手で包まれている。手で支えなければ溢れてこぼれおちそうなくらい大きく、柔らかい。

その胸を支えている手は俺の手だ。

この柔らかい感触はおっぱいだった——巨乳だった。

その娘は俺の腰の上にまたがり、おっぱいを掴んでいる俺の手を両手で包みこんでいる。

むしろあてている！！？

その両手に力が入り、左手が握りしめられる。

その娘は、あふれるような笑顔で、語りかけてきた。

「ごしゅじんさまのご恩に報いるべく、犬神になって帰って参りました！ごしゅじんさまの望みを、なんなりと申しつけ下さい」

「私が全力で報います！」

「犬……神？」

よく見ると、頭には動物の耳らしきもの、犬の耳のようなものが生えていて、その背後で大きなふさふさとした尻尾がゆっくりと左右に揺れている。

犬耳巨乳少女……だと！？

これが俺の夢の、理想の女の娘の姿……

俺は左手を滑り落ちるように引き抜くと、荒れたコンクリの床に下ろし、持ち上げていた頭をそっと地につけ目を閉じた。

俺は……微乳派だ。

というわけで、別の夢を見ることにした。

「ご主人さま？」

いい夢見よう。

夢というものは望んだものが見られるわけじゃない

「ごしゅじんさまー」

ある時は電車に乗っていたり、ある時は山道を歩いていたたり、真っ暗なトンネルを歩いていたたり、廃墟に中を探索していたり、空から落ちてきたりする。

「ごしゅじんさま？」

この夢は色もあり、空気感もあり、自分が夢を見ているリアルな夢だと実感できる。

ペロペロ

夢を見ていると自覚できる夢というのは、夢の内容を破綻させるような事を想像しない限り、その夢をコントロールできるとかどこかで見えた気がする。

ペロリ

なら、この『かわいい女の娘にペロペロされて起こしてもらおう』という大筋を曲げずに、『巨乳で犬』という部分を変えれば良いんだ。

ペロペロ

そう、今こうして俺の頬を舐めているのは……

ちゅうちゅう

小柄で、控えめな胸の……

かみっ

「みみたぶっ!？」



不意打ちの甘噛みに思わず上半身を起こしてしまう。

目の前には相変わらず俺の上にまたがったままの犬耳が、期待のまなざしを投げつけてくる。

「ごしゅじんさま！目が覚めましたか？」

悪夢かこれは……

そういえば体も寝汗で濡れているのか冷たくて、なんか寒気がする……

頭も髪が濡れているのかベタベタして、冷たく……

それに何だか生臭い……

ふと頭の後ろに手をやって、自分の後頭部をさわって確かめようとするところ――バリバリという音とともに、粘る感触が後頭部全体から伝わってくる。

……嫌な予感がする。

手についた粘つくものの正体を確かめようと自分の手を見ていると、その手は真っ赤に染まっていた。

赤いペンキだった……粉々に砕けて、パラパラと落ちていく。

……血？

体を上半身を起こし後ろを振り向くと、背後一面に赤黒いジメジメとしたシミのような、水たまりのようなモノができていた。

そこにピンク色のぶよぶよとしたものや白いブロックの破片のようなものや、黒くてもじゃもじゃしたものも混じって散らばっている。

「願い事は一つだけとかだっけ？」

「いえ、私が力の続く限りごしゅじんさまの望みにお応えします！」

上半身を起こしたため膝の上にまたがったままの犬耳と向かい合う形になる。

期待を込めたまなざしで、耳を立ててまっすぐにこちらを見つめてくる犬耳、しっぽは大暴れだ。

「じゃあ、なぜ俺の後ろに殺人事件現場のような血だまりが広がっているのか教えてくれ」

「はい！」

「私が地上に降りてくる時に、うっかりご主人様の頭にぶつかって、木っ端みじんにして、しまったためです」

曇りない笑顔だ一。

「でもご安心ください、ご主人様の頭は私が舐めて直しておきましたから心配いりません！」

期待の込められた視線を受け止めながら、息を吸い――

「悪夢だああああああああああああああああああ！！！」

目の前には正座した犬耳、背後には血の海。

俺はあぐらをかき、血染めのシャツやらパーカーやら、ジャケットやらを脱いで置く。

冬の乾いた冷たい空気の中、上半身はまっばだか。

寒い。

とはいえ、濡れてベトベトしているうえに、それが血だとさすがに着ていられない。どこかで洗わないと……。

木枯らしに吹かれてクールダウンした頭で、背後に広がる非現実的な血の海と、醒めない悪夢について考えてみる。これが夢でないわけがない！

「えーっと、俺を殺した！？」

「いえ、ご主人様の頭をうっかり、木っ端みじんにしただけで」

「うっかりで木っ端みじんにされてたまるか！これが現実ならとっくに死んでるわ！」

「ギリギリセーフでした！」

「ゲームセットだよ！こうして俺が活着ているのは延長戦か！？」

「大体だな、頭が木っ端みじんになっても、舐めれば治るなんて、無理があるだろ」

「私が舐めればどんな傷だって、すぐに完治するので、いくら死んでも大丈夫ですよ！」

自慢げな視線でこっちを見るな！

「いくらも死んでいられるか！」

「だいたいだな、いくらなんでも舐めて治すとかありえないだろ」

いくら夢だからってそれはないわ。

だいたい、木っ端微塵になった頭をどうやって舐めるんだ……と想像したら怖いことになった。

深く考えるのはよそう。

「で、だ」

「はい……」

「この悪夢はいつ醒めるんだ？」

「悪夢……？ご主人様はすでにお目覚めになってますよ？」

「こんな非常識な現実があつてたまるか！」

悪夢ほど醒めにくいもの。でなきゃ良い夢だけ見ていられるからな。

この悪夢を良い夢にするべく、一面が御花畑とか、目の前の犬耳が微乳な細身少女になる事を念じてみたけれどだめだった。

ただ血のにおいと、やけにリアルな木枯らしが、鼻と体に突き刺さる。

現実のようだけれど、これが現実であつてたまるか！

「お前は、俺に恩返しをしにきたんだっけ」

「はい！ご主人様に受けた恩に報いるために、ご主人様の望みのために働きにきました！」

「お前が俺の望みを叶えに来たのなら、俺の望む姿で現れるはずだろ、なんで俺が望まない姿でやってきたんだ？」

「望まない姿……とおっしゃいますと？」

「俺は微乳派だ、細身の方がいい。その姿で来た時点で、すでに俺を裏切っている！」

「とおっしゃいまして……ご主人様の望みに報いるため体なので」

「俺はこんな形は望んでない」

という俺の手を取ると――

「ここにはご主人様の望みを叶えるための力が詰まっているんですよ」

犬耳は自分の胸に押し当てた。

その柔らかさに、肉に指が沈んで埋まってしまいそうで……慌てて手を引き抜く。  
「その恥じらいの無さも望んで無い！」  
「いつも私のおっぱいを撫でたり揉んだりしてくれていたじゃないですか」  
「お前の胸を揉んだ覚えなんか無い！」  
「犬の腹を撫でた事ならあったかもしれないが、同じ人間の腹となると別の話だ！！」

それに――

「そもそも俺は、犬を飼ったことは、無い！」

そう、俺は犬を飼った事は無いはずだ。

「だからお前が、恩返しに来たなんて、信じられないな！」

「そんな……」

そう、俺の家は……家……あれ？どんな家だったっけ？

……そもそも俺の家ってどこだっけ。

ド忘れてレベルじゃないよな、これは夢の中だから思い出せないのか。それとも、犬耳に頭を木っ端みじんにされたから思い出せないのか。

よくよく考えてみたら、自分の名前すら思い出せない事に気づいた。

俺は誰だ？

「えーっと、犬耳の……」

「はい！なんでしょう、ごしゅじんさま！」

「お前は何て名前なんだ？」

「さあ……」

「さあって、お前は自分の名前もわからないのか？」

「わかりません。ただ、ごしゅじんさまは私のことを『わんわん』って呼んでくださってました」

「じゃあ、俺の名前は？」

「ぞんじません」

「お前は恩返しする相手の名前も知らずに降りてきたのか？」

「私はごしゅじんさまの名前を聞いたことが無いので……ごしゅじんさまはじぶんの事を『ボク』とおっしゃられてました」

『わんわん』に『ボク』か、……この呼び方からして、俺は子供の頃にこいつと関わっていたのだろうか。

このままじゃ

そうだ、携帯や財布を確認すればなにか出てくるだろう。

血を吸って重くなっているジャケットを手にして、ポケットに入っているであろう財布や携帯を確認する。

携帯があった！けれど電池が切れている……。

財布の中には13円とレシートと、キャッシュカードがあった。

側には何かの入ったビニール袋がある

レシートの日付は12月21日の午後15時26分か。

今の空を見るに……曇っていてよくわからないけれど、日差しの感覚から朝っぼいな。

……もしかして、ここで一晩過ごしたのか？

表面の塗装が剥げた、使い込まれているキャッシュカードには、カタカナで『イナリ・キミヤ』と刻印されている。自分の名前らしい。けれど、自分の名前だという実感が無い。

これが……自分の名前なのか？

まあ夢の中で自分が誰だろうとこいつが何だろうとどうでもいい。

かといって冬のように寒い空の下で、木枯らしに吹かれながら上半身まっぴらで、血の海のそばであぐらをかいていてもしょうがない。

とりあえず服をどうにかしないと……

「じゃあ犬耳、俺の服をきれいにしてくれ。裸のままじゃ寒いし、血でベトベトじゃ着ることができないからな」

「私は服をきれいにすることはできません」

「じゃあお前は何ができるんだ」

「物を増やすことと、増やした物の姿を変える事ができます！」

「物を増やすと増やしたものを変える？」

「今からやってみせますね」

そう言うと犬耳は自分の胸に両手を当てた、すると、手の内側が輝きだし……

「タマフリ・ボウル～♪」

両手の中に、どんぶり程の大きさの金色っぽい……真鍮でできたボウルがでてきた。

「それは？」

「これは『タマフリ・ボウル』といって、中に入れたモノを増やす事ができるのです！」

「いまからやってみますね」

というと、犬耳は側にあったビニール袋の中から紙に包まれた……肉まんを取り出した。さっきのレシートの奴か。

その肉まんを包み紙を外してボウルに入れ――

「ふえ～る♪ふえ～る♪」

と呪文を唱えながら揺らし始めた。そんな呪文で大丈夫なのか。

「ふえ～る♪ふえ～る♪」

ボウルを左右に揺らしている。そのボウルの中をのぞき込むと、中の肉まんがゴロゴロと左右に転がる。

「ふえ～る♪ふえ～る♪」

ねればねるほど、色が変わりそうな呪文だな。

「ふえ～る♪ふえ～る♪」

と見ているうちに、中に入っている肉まんがブレて見えてきた。

？

目を凝らして見つめても、肉まんは2個に見える。やがてそれははっきりとしてきて、ゴロゴロと2個の肉まんが転がる音になり――

「できました！」

という声と共に、犬耳が手を止めると、ボウルの中には2つに肉まんが増えていた。

その肉まんはどちらも食べかけで、転がった時にいくらか変形したものの、大きさは同じ。

2つの肉まんをかじってみると、どちらも同じ味がして、どちらも冷めている。

「これは便利だな」

「はい！」

期待に満ちた目でこちらを見つめている犬耳。

「で、だ」

「はい！」

「血まみれのジャケットを増やしてどうする」

血まみれのジャケットが増えた所でそれを着てもどちらも血まみれならどちらも着られない。

「増やしたものをごしゅじんさまの望む姿に変える事ができます」

「望む姿に変える？」

なるほど、元からあるものを綺麗にはできなくても、増やしたものを綺麗にすればいいのか。

「どれどれ」

早速ジャケットをボウルに入れてみた。

といっても冬服のアウトターがどんぶり大のボウルに入るのか？と思っていたら、アウトターはスルスルとボウルの中に吸い込まれていった。

どんぶりの中に、小さくなったジャケットが収まっている光景は、非現実的だ

「ではいきます！」

犬耳がボウルを左右に傾け、中身を揺らす。

「ふえ～る♪ふえ～る♪」

ボウルの中のジャケットがブレてきた。

どちらが増えたものなのか、見分けがつかないくらいにそっくりだ。

「さあ、ごしゅじんさま！きれいになるように念じてください！」

「俺が！？」

「はい！私にはご主人様の望む姿はわからないので、ご主人様が望む姿にしてください！」

「なら……きれいにな～れ～、きれいにな～れ～」

こんな感じか……

と見よう見まねで念じてみると、片方のジャケットの血が薄くなっていく。

おおっ、この調子で……

「きれいにな～れ～、きれいにな～れ～！」

念じれば念じるほど、増えた方らしきジャケットがきれいになっていく。

しばらくすると、血で汚れたボロいジャケットと明らかに別物な、きれいなジャケットになっていた。

「できました」

犬耳がボウルに手を入れて、きれいなほうのジャケットを取り出したので、手にとって確かめてみる。

汚れと呼べるモノは無い。ウォッシュのかかった素材感だけはそのままだ、汚れと呼べるようなシミや汚れは一つも無くなっていた。

新品ですらここまできれいではないかもしれない。

服を綺麗にできるのか……

と、冷たい肉まんをかじって思いつく。

「この肉まんを温めることはできないのか？」

「暖める事なら私だけでもできます」

「ならやってみてくれ」

食べかけのどちらが本物かわからない肉まんを差し出すと、  
食べかけの肉まんをボウルに入れ――

「あたたまれ～ あたたまれ～」

と、ボウルを揺らし始めた。

すると、片方の肉まんから湯気が立ってくる。

「このくらいですか？」

と犬耳が手を止めたのでボウルの中を覗きこむと、2つの肉まんのうち片方だけから湯気が出ている。

手に取ってみると、片方だけ暖かい。

試しに暖かい方を食べてみると、ちゃんと中まで暖かい。

「これは凄いな。物を増やしたり、綺麗にしたり、暖めたり、夢の中だけあって何でもアリだな」

「これは夢じゃありませんよ」

またまたあ～ってな顔で犬耳が反論するが華麗にスルー。

「じゃあ次は携帯を増やしてその増やした携帯を充電するってのはどうだ？」



「やってみますね、ふえ～るふえ～る♪」

ノゾミがボウルを揺らし始めると、携帯電話が二つに増える。

そのボウルの中を見つめながら、携帯電話が充電されている状態を……？

充電された携帯ってどんな状態だ？

バッテリーが充電された状態ってのはよくわからんし、バッテリーアイコンが点いている状態を想像すればいいの……か？

「ジュウデーン？ジュウデーン！」

とりあえずジュウデーンとでも言っておけば充電されるだろう。

と、しばらくジュウデーンと言いながらボウルの中の携帯を眺める。

……見た目じゃどうなってるのかわからないな。

ノゾミはただゆっくりとボウルを振っている。

「もういいぞ」

「はい」

外観から判断がつかないならとりあえず取り出してみるしかない。

ボウルから二つの携帯を取り出す。

どちらも重さは同じでキズや汚れも同じ。どっちがどっちかわからないので、とりあえず電源を入れてみる。

……どちらも点かない。

やっぱり充電という想像できない漠然としたものには出来ないのか？

このままではどちらが本物かわからないので、ボウルに戻すと「きれいにな～れ」と念じてきれいになった方の携帯を取り出すと、汚れた服と一緒に置いといた。

全てが上手くいくわけじゃないか……

しかし、夢の中で夢のような出来事に遭遇しても、夢としか思えない。

夢か現実かを確かめるには……

頬をつねる……痛い痛い。というほど痛くもないし痛い実感が無い。

いや、痛いという感覚がリアルな夢なのかもしれない。

寒くて血のにおいも感じるからといって、この現状が、現実であるとは限らない。

リアルなだけの夢で、目が覚めれば何事も無いいつもの日常が待ちかまえているのだろう。

そうだな……

「じゃあ、俺の指を、噛んでみろ」

「それで、その傷を治せたら、お前を神様だと、信じてやる」

「そんな！」

「痛かったら、夢でも幻でも、無いし、それを治せたらお前が神様だと証明できるぞ」

ためらいながらも、俺の右手を取ると……

「では……」

口を開け、俺の人差し指を口に含んだ。

「うおっ……」

指の先に触れる熱く濡れた、ぬめるもの、それが動いて指を吸ってくる。

必死な表情で人差し指を根本まで飲み込み、必死に吸い立てる。

その感触におもわず腰がひけ……

「舐めてどうする……噛むんだ」

危ない危ない。

「ふあい」

犬耳が答えるために口を動かすと、歯があたり、唾液が口からこぼれ落ちる。

伝う滴が顎から糸を引きながら落ちていく様は……エロい。

指に硬いものが触れ、挟んでくる感覚が伝わってくる。

噛んできた。と思ったら甘噛みだ。

「もっと強く噛まないで、血は出ないぞ」

「ふぁ……、ふぁひ！」

意を決したのか、口を大きく開けた。流れ込む空気が指を冷やし――

ゴリッ

「痛〜〜〜ッ！」

噛まれたーッ！

「ご主人様！」

指の腹に小さな、トゲでもささったかのような傷口が指の腹に出来ている。

爪の側も痺れるように痛い。

しばらくすると、そこに赤い血の玉が出て来て、じわじわと大きくなってきた。

「痛って～……指の先がジンジン痺れて、小さい傷だと思ったら、血が止まらないんだよな」

傷口のこの、痺れるような、図工の時間にうっかりトンカチと釘の間に指を挟ん

で打った時のような痛み。

犬の牙で咬まれた時ってこんなだったなあ……それで傷口は小さいのに、血はどんどん出てきて……

赤い球になった血が、指を伝い流れ落ちて行く。

その血がこぼれないように指を口に含む。鉄の味と、生臭い味。

傷口を舌で触れてみると、走る痛み、切れている傷口の、皮膚の感触。

口から指を離すと、血が止まったかのように見えたけれど……じわじわと傷口から血が滲んできて、爪の側はじんじんと痺れている。

この痛みと、血の味と臭いは……現実なのか？

もし、これが夢でなく現実なのだとしたら……

「ご主人様！いま傷を治しますね！」

「うおっ」

見つめていた右手をとり、指を再び口に入れる犬耳。

先ほどとは違い、敏感な、傷口だからこそ……こうして舐められるという傷口に触れる舌の感触は、痛みと呼ぶには気持ちよくて……

傷口を埋め合わせるために、注ぎこむかのように、舌が傷口を這う。

それは、じわじわと染み込んでくるようで……

「できました！」

「あえ？」

犬神の口から指の間には、透明な糸、唾液の糸が引いている。

「あ……、治ってる」

さっきまで血が止まらなかったのに、指で傷口があった場所を摘んでみても、血が出ないどころか痛くもなんともない。

木っ端みじんになった俺の頭を舐めて……グロい想像になりそうだったので考えるのはよそう。

こいつ、本当に俺の怪我を治したのか。

「どうですか？」

現実のような痛みと臭いは、夢のように消えて無くなった。

いま、体を撫でる冷たい風も、辺りに漂う血のにおいも、全て本物なのか？

こうして犬耳女の娘が目の前に居ることも現実なのか……

「お前が傷を治せるのは分かった、つーことは……」

「はい！」

「本当に俺の頭を壊したのか！」

「ごめんなさいiiiiiiiiiiiiiiii！！！！」

土下座、というか伏せの姿で平身低頭謝る犬耳。

こいつは本当に、神様なのか？

目の前で伏せている犬耳……犬の耳……顔を伏せ、頭を伏せて、耳を伏せ、しっぽも地面に伏せている。

その犬の耳を摘む。と、ピクンと揺れる。

そのまま引っ張ってみる。

「ひゃん！？」

びっくりしたのか顔を上げる。

「犬の耳みたいだな……」

やたらとリアルなつけみみ、というか頭とくっついていて動いている。本当に犬の耳っぽいな。

どうやらこの犬耳、本当にくっついているようだ。

などと考えつつ耳を撫でてみると、「はふう……」と、甘いため息を出し、しっぽを大きく左右に揺らした。

そのリアクションに思わず手を離す……

「もういいんですか？」

「もういい」

「しっぽもありますよ？」

「いい」

さすがにしっぽはついている場所が場所だ。

いくらなんでもな。

「本当に犬耳なんだな……」

「はい、犬神ですから」

人間の耳が生えている場所を見してみると髪の毛で隠れているので、その髪の毛を手でかき分けると、そこにも耳が生えている。

両方ついてるんだな……

と、考えながら犬耳の視線に気づく。

その表情は満足げで、目はまっすぐに、何かを期待するかのようにつめて  
いる。

「よしよし」

頭を撫でてみると、目を細めて、耳をふるわせて、しっぽを大きく揺らした。

もっと撫でてほしいのか、撫でてる手に頭を押しつけてくる。

うーん、犬だ。

そういえば、こいつの名前……

「お前、名前は無いんだったな」

「いえ、わんわんと呼ばれてました」

「それは名前とは呼ばない」

わんわんってのは幼児語で犬を指すのであって名前じゃない。たとえ名前だとして  
も、わんわんはさすがに無いな。

「犬神の……恩返しにきたから、オン……いやいや。ネガイ……これも違うな……」

「？」

「望み望みと言っていたな……」

「よし！お前は『ノゾミ』だ！」

「え……」

「お前の名前だ、『ノゾミ』だ。『イヌガミ・ノゾミ』なんてのはどうだ？」

きょとんという表情ってのは、本当にきょとんとしていて――

「ノゾミ……」

目を閉じ――

「ノゾミ……」

胸に手を重ね――

「ノゾミ……」

繰り返しつつやく。

その閉じた目から、涙がこぼれ落ちる。

「はい！私は、ご主人様の『ノゾミ』です」

こぼれるような笑顔とは、こういのを言うんだらう。涙を溢れさせ、こぼれさせな  
がら、笑っている。

その嬉しそうな表情――

俺のつけた名前を、喜んでくれる。

……目が熱いので、閉じる。

「そのご主人様というのもやめろ。」

さすがにむずがゆい。

「キミヤでいい」

「はい、キミヤさま♪」

嬉しそうな顔で、目を細めて、笑顔で、まっすぐに見つめながら、名前を呼んでくれる。さま付けで。

もしもこいつが、俺の望む姿だったら……

ということを考えても仕方ない。

ここはどこなのか確かめるべく、立ち上がろうとすると、ワキ腹に痛みが走る。

ノゾミにぶつかったからか？

それほどの痛みでも無いのでそのまま立ち上がり、ノゾミを背に辺りを見回す。

そこはボロボロの荒いコンクリートの上で、鉄柵に囲まれた高い場所。

出入り口のような扉がある。

鉄柵に近寄り見下ろすと、結構な高さで、下には割れて雑草が吹き出しているアスファルトの駐車場がある。

辺りを見回すと山の中らしく、他に建物は無い。

ここがどこだかわからないが、おそらく廃墟か何かだろう。

どうして俺はこんなところに居たんだろう。

といっても思い出せないのだからたない。

「いくぞ、ノゾミ」

「はいっ！キミヤさまっ」

駆け寄ってきて、左腕に抱きついてきた。

「ぐおっ！」

腕に絡みつくとノゾミの肘が痛めているわき腹に突き刺さる。

「やめろーっ！」

といっても離れず、腕に絡みついてくる。

当たっているのは肘だけではなく、ノゾミの体は、服ごしでも暖かく、柔らかい。

そんな欲望に負けはしない。ここでこいつを受け入れたら何か負けた気がする。

「おあずけっ！」

「！！」

とっさに言った命令に、ノゾミは離れて気をつけの姿勢になる。

耳もしっぽもぴんと立てて、嬉しそうに。

「いつまでもここに居ても寒いだろ！ほら、いくぞ！」

「はい！」

後ろについてくるノゾミと共に。

廃墟の屋上を後にした。

頭がガビガビする。

廃墟を後にし、ボロボロのアスファルトが残っている落ち葉と砂利に埋もれかけている山道を下りながら、頭をかく。

歩くたびに血で固まった髪から赤い粉が落ちてくる。

首筋でスエットとの間にたまった血の粉がかさかさとして背中落ちていく。

きれいにしたジャケットも、下に着ている服も真っ赤だろうな……

背中に張り付いた粉がかゆい。かきたいけれどかけない。

鏡で自分の姿を確かめて無いからわからないけれど、もしかして今の俺の姿はかなりスプラッターな、ゾンビみたいな事になっているんじゃないだろうか。

ゾンビといえば、体がかゆいとか言っていたら、ゾンビ化していたとかあったなあ……

これってもしかして、ゾンビになる徴候なんだろうか。

このまま何日かたったら、かゆ……うま……

洒落にならない冗談は考えないようにしよう。

今の俺の姿はどうなっているのか……。

「ノゾミ」

「はい！なんでしょう、ごしゅじんさま！」

振り向き、自分の後ろについてきてこちらを見つめている犬耳娘に訪ねる。歩くたびに長い波打つ髪と、大きい乳と犬のしっぽが揺れている。

全体的に大きいな。

俺の望んでない姿で現れた、俺の望みを叶えるという、犬神のノゾミ。

タマフリ・ボウルの中に入れたものを増やしたり、暖めたり、きれいにしたり出来るという。

物を増やしたりその姿を変えられる……ということは元手の金さえあればいくらでも増やせるわけか。

「——ごしゅじんさま？」

「ん？」

ポリポリと頭を搔いて、そのポリポリでノゾミに、今の自分の姿について訪ねようとしていたことを思い出す。

「ノゾミ、いま俺の頭はどんなになってる？」



「はい！ちゃんとくっついてます！」

「そうじゃなくて……血がついてないか？」

「傷口でしたら血はしっかり固まっていますよ」

「ケガじゃなくて、血で汚れていないかってことだ」

不思議そうな顔をして俺の顔を見つめ……

「ごしゅじんさまの頭の毛は血でべっとり固まっていますね」

と、答える。血が汚いとか、そういった発想は犬だから無いのだろうか。

やっぱりかー……どうしたもんかな。

「私が毛づくろいしてさしあげますね」

と、舌を出して嬉しそうに寄ってくるノゾミの顔を掴んで制止しながら考える。

こんな山の中で風呂に入れる場所があるわけでも無いし……そうだ。

「ノゾミ、この近くに温泉は無いか？」

すると、

「温泉の匂いは……水の臭いでしたらあちらからしてきます」

と即答する。さすがは犬の神様だ、鼻がきくな。

さっそくノゾミに案内させ、山道を藪道をかき分けながら獣道を通って進むとわずかに開けた岩場の隙間に湧き出る泉を見つけた。

そこには小さな池、というほど広くもなく、水たまりほど狭くもない。ちょうど風呂桶2個分程の広さの底が見えるほど透き通った泉があった。

水面を見ると、鏡のような水面に覗き込む自分の顔が見える。

誰だろう。

自分だとわかる。

けれど、腑に落ちない。

目の前の邪魔モノをかき分けるべく、水面に手を入れようと――

試しに指の先を入れてみる。

「つめった！」

い～。

湯気が出ていないから冷たいんだろうなあ、とおそるおそる入れた手を刺される。  
この真冬に山の上の湧き水がどれほど冷たくなるのかを、痛みのような冷たさで思い知らされた。

これで頭を洗うとか無理だな。

修行とかで冬の滝に打たれるとか見たことあるけど、滝でなくてもこの泉にこのまま入ったら確実に死ぬ。

心臓が止まって死ぬ。頭にかけたら頭が止まって死ぬ！

そんな痛冷たいのはゴメンだ。

「これじゃ頭を洗えないな……」

「すみません……」

耳を伏せるうつむくノゾミ、まあこんなことは予想済みだ。

「ノゾミ、ボウルで水を汲んで暖めるんだ」

「ごしゅじんさま、私は増やしたのしか変化させることはできませんよ」

「ああ、水を半分ほどくんで、それを増やしながらか暖めればいいんだ」

「わかりました！」

顔が晴れ目を輝かせるノゾミ。耳も起きてしっぽも踊り出す。

身を屈め、泉の水をボウルで汲み、胸の前で揺らしはじめた。

「ふえ～る　かわ～る　あたたま～る」

ボウルが揺れると、中の水が増えていく。

「元のものは暖められない……」

そして、増えた水から湯気がたってきた。

「しかし、増やしたものを暖めて、その熱で元からあるものを暖めれば……」

ボウルに指をを入れてみる。温度は程良くいい湯加減。

「やっぱり、温かい水になっている」

「じゃあ頭を洗うから、言った通りに頭にかけてくれ」

「はい」

これで、頭を洗える。ジャケットが邪魔なので脱ぐ。

襟のところに乾いた血がこびり付いている。これも後でボウルできれいにしないとダメだな。

ジャケットは手近な岩にかけて、上半身トレーナーだけになって体を屈め、水面を見つめる。

「じゃあかけてくれ」

「はい！」

ノゾミの返事と共に暖かいものが頭に注がれてきた。

水面に赤い滴が落ちて、波紋を作っていく。

あー、あったかい。これなら頭を洗うのも……と、血を落とすべく手で頭を掻こうとしたら、湯が止まった。

「ん？」

「ごしゅじんさま、お湯が無くなりました」

ボウルの中身は空っぽだった。

そりゃあ井程度の大きさなんだから、すぐに中身が無くなるよな。

「全部かけなくていいんだ、増やしながらかけてくれ」

「はい！」

ノゾミに改めて指示を出し、再び身を屈めて水面を見つめる。

「ふえ～る かわ～る あたたま～る」

再び頭に湯が注がれてきた。今度は途絶える事無く、頭に注がれ続ける。

湯が出るのを待つ間に冷えた頭が暖まってきたから、指を湯に潜らせながら自分の頭を掻く。

ヌメヌメとした感覚と髪が固まっている感覚。まるで墨汁を吸ったままの筆を洗っているような感じ。

固まってる髪を摘んで、揉むようにしてほぐしていくと、水面に落ちる滴の赤さが増す。

すごい血だな……

滴り落ちる血の滴は水面に落ち、泉の水を赤く染めていく。

まるで血の池だな……

こうして頭を洗って、服もボウルできれいにすれば、人に見られても平気だろう。

「ごしゅじんさま、湯加減はいかがですか？」

「もうちょっとあたためてくれ～」

「はいー」

指に触れる湯が程良く熱い。

髪の間から流れ込んでくる湯が、頭に心地良い。

こうしてご主人様と呼ばれながらご奉仕される事は悪くは無いな……

って、までよ？

「ノゾミ」

「なんですか？ごしゅじんさま」

「そのご主人様というのやめて、キミヤって呼んでくれないか？人前でそんな呼び方されたら困るから」

「なぜですか？キミヤさまは私のごしゅじんさまなのに」

「俺が自分の彼女にご主人様プレイをさせているように見えるんだ」

「かのじょ？ぷれい？……ってなんですか？」

彼女やプレイという言葉の意味について説明するのも難しいな……

「ごしゅじんさまはごしゅ……キミヤさまは私のごしゅじんさまですよ？」

まっすぐにこちらを見つめてくる。

「人間同士で相手にご主人様と呼ばせるのはおかしいんだよ」

「どうしてですか？」

ノゾミには理解出来ないらしい。

「ん～……」

上手く言葉に出来ないな……。

返す言葉が浮かばず、ただ注がれる湯を浴びながら、頭を掻きつつ考える……

ご主人様なんて言わせるのは『自分は命令に服従します』って言っているのと同じで。

他人の言うことに無条件に従うってのは、相手の言いなりになるということ。

自分が相手の望む通りにされてしまうということだから……

「ノゾミだって命令されたらイヤだろ？」

他人を思い通りにしようなんてのは、思い通りにされる側にとっては自分の自由を奪われるってことで、自分が自分でいる意味が無くなるからな。

「いえ、私はごしゅじんさまの言うとおりにするしか……」

「自分のやりたいこととかあるだろ？お前の望む事とか」

「わたしの望みは、キミヤさまの望みに従うことなのです。ですから、キミヤさまが望む事を命じていただけないとわたしは何もできません……」

耳をふせて困るノゾミ。

ああ……

人間の姿をしているから人間のように扱っていたけれど……

こいつは犬だった。

人間の俺に恩返しをするために人間の姿になってやってきた犬神様。

自分で何かをしたいという事は考えられ無いのだろうか。

仮にこいつが彼女で俺の言うことに望んで従うとしても、誰かに命令しなければならなかったり、従わせなければ関われないというのは嫌だな。

なんて考えていると、背筋がゾクッとしてきた。

さすがにスエットだけじゃ12月の空気のなかじゃ厳しいものがあるよなあ……てそうじゃない。

単に寒いんじゃなく、湯が首を伝って服に染み込んでいって、冷えている。

首の所を伸ばしてみると、首を伝いスエットに染み込んでいった血の滴は、血のシミを広げていた。

こうなったら洗うだけ洗ってから服をきれいにすればいいかなと思ったけれど、このままだと染み込んだ血が上半身全体についてしまうので結局脱いで上半身をきれいにしなければいけない。

といってもすでに背中も冷たく、染み込んで汚れているのがわかる。

服を着る時に頭を通したのだから当然のごとく血がついていて、それが背中にも腹にもついてるのだろう。

……覚悟を決めるしかないか。

「ノゾミ、もういいぞ」

「はいー」

湯をかけるのをやめさせ、髪を指で挟んで水気を切って顔を上げると、伝い落ちる滴が唇に入り、鉄と塩の味がする。

「ノゾミ、この泉をきれいにしながら温めるぞ！」

血の池のように赤くなった泉を指さす。

「キミヤさま、わたしは増やしたもののしか変える事はできませんよ」

「ああ、だからこの泉にボウルを入れて、湧き水を増やしながらかつ湯にするんだ」

「はいー、やってみますね〜」

そう、いちいち泉から汲んで頭にかけてなくても全部の水をかきださなくても、泉そのものを温泉にすればいい。

そして温泉にして浸かってしまえば全身も楽に洗える。

必要なのは湯に変えることじゃなく、こいつの前で裸になって、風呂に入る覚悟だ。

「暖めるついでにきれいな透明な温泉にしてくれ」

「はい、ではキミヤさまがきれいだと思う姿を想像してください」

「目の前にあるのにダメなのか？」

「温度を変えるだけでなく混ざっている血を取り除くので、キミヤさまが血の混じっていないお湯を想像してください」

まあそのくらいなら簡単だ、ついさっきまで見ていたし、泉の底から湧き出ているからな。

湧き出している清水を見ながら、きれいな水を想像する。

ノゾミがボウルを泉に浸して揺らす。

「ふえ〜る かわ〜る あたたま〜る」

泉に浸されたボウルから湯気が立ち上り、血の色をしていた泉が綺麗になっていく。

湯気が水面を滑り、その合間から覗く水面は底まで見える程の澄み切っている。

ボウルの力はすごいもんだな。こうして目に見えるともた違うもんだ。

「こんなもんか」

泉に手を浸してみる、43度くらいだろうか？

それほど大きいわけでは無い泉だから直ぐに暖まってくれた。

これなら入っても大丈夫そうだな。

.....

服を脱ごうかと思ったら、ノゾミがこちらを見つめている。にっこにっことした笑顔で。

あっちを向いていてくれ、といっても狭い泉、すぐそばにノゾミが居たら気になる。

「ノゾミ、ちょっとあっち向いていてくれないか？」

「はい！」

言われるままに向こうを向くノゾミ。

「よーし、そのままだ。いって言うまでこっちを向くんじゃないぞ」

とりあえず上半身の服だけ脱ぐ。

血がパリパリと音をたてながら剥がれ、カサカサと体の上を落ちていく。

脱いだスエットは血でベっとりだ。

一度ボウルで新品同様にしたにもかかわらず、だ。

血塗れなのは上着だけでよかった。これがズボンやパンツまで濡れていたら綺麗にするのが大変だった。

こうして上半身を脱ぐだけでも……やっぱり恥ずかしいモノがある。

ノゾミは人間じゃない。

他人の前で服を脱ぐ。といってもこいつは人じゃなくて犬だ。神様だ。

かといって側で服を脱ぐのは気が引ける。

人の姿をしているのだから。

こいつに裸を見られてどなるのか？

恥ずかしい？

犬に姿を見られても恥ずかしくない。

けれど、こいつは女の娘の姿をしている。

けど……こいつは人間じゃない。犬の神様だ。

そう、俺の望みを叶えにきてくれた神様であり、犬なんだ。たまたま人間の姿をしているだけで。

犬だから他人ではなく、恥ずかしく無い……

……といっても人間の姿をしているから、やっぱり無理だ。他人として意識してしまう。

「……キミヤさま？」

いつのまにか顔をのぞきこんでいたノゾミの視線で我に返る。

「ああっ、じゃあこの上着をきれいにしてくれ」

「はいー」

ノゾミの抱えているボウルに上着をすべて入れ、綺麗な服を想像する。

「きれいになれ～きれいになれ～」

「ノゾミ、もう湯は温まったから、しばらくあっちの木の陰であっちを向いててくれないか？」

「どうしてですか？」

「ここで暖めていないと冷めてしまいますよ？」

「いいから、あっちの木の陰にいてくれ」

「はいー」

言われるままに近くの木の陰に隠れるノゾミ。

木を挟んでいるとはいえ、他人がすぐそばにいる所で服を脱ぐのは恥ずかしい……

などとウダウダしていても、冬の空気が直に上半身を刺すので、さっさと下を脱いで暖かくなった泉に浸かることにした。

「あ～、生き返る～」

極楽極楽

「キミヤさま、湯加減はいかがですか？」

「ちょうどいいぞ～」

木陰から呼びかけてくるノゾミに、ため息混じりに答える。

外で入る風呂がこんなに気持ちいいなんて、

体の中の疲れとかいったにごりが流れ出ていくみたいだ……

汗がどんでんできて、額に滴を作っているのがわかる。

流れ落ちてきた滴が口に入り、塩と鉄の味がする。

そういえば体についている血を洗い流すんだったな。

温泉の魔力に本来の目的を見失う所だった。



横になってくつろいでいた姿勢から体を起こし、水面に向かい……。

髪の毛を浸しながら洗う……洗いづらい。

全身浸ってるんだから、もう潜ってしまえばいいか。

でも――

なぜか、水に顔をつけるのが怖い。

俺って泳げなかったっけ？

覚えていない。ただ、水面に映る影になっている自分の顔を見つめ……

意を決し。

潜る！

暖かい湯の中で浮き上がろうとする体を押さえながら、頭をひたすらに搔く。

外で洗っていたのとは違い、髪を搔く度に湯がしみてきて、固まった髪がほどけていくのがわかる。

ネバついていた髪が湯の中で踊る感覚が指に伝わってくる。

ぶはっ！

顔の水気を手で拭って水面を見ると、水の中には赤いもやが出来て、泉はうっすらと赤く染まっている。

これが全部頭にこびり付いていた血のなんだろう。

ノゾミに湯を注いでもらいながら頭を洗ってから入ったのに、こんなに血が落ちるなんて……

やっぱり覚悟を決めて湯に入って正解だったな。

「キミヤさまー、だいじょうぶですかー？」

ノゾミが呼びかけてくる。

「どうしたか～？」

「息苦しそうでしたのでー」

ああ、息継ぎの事か。

「だいじょうぶ～。ちょっと潜って頭を洗っているだけだ～」

「わかりましたー」

心配して声をかけてくれたのか……

ノゾミは俺の望みを叶えるためにきたという。  
けれど、その姿は俺の望むタイプの娘じゃなかった。  
あいつ自身は俺の望んだものじゃない。  
けれど、こうして望むままに湯を温めてくれたりする。  
……といってもあいつが原因で血塗れになったわけなんだけど……

再び湯に潜りながら、考える。

あいつは俺のために何かしようとしてくれる。  
実際モノを増やしたり、服を綺麗にしたり、水を温めたりできる。  
あの力で俺を幸せにするために命令に従うという。  
こうして俺が風呂に入っている間にもあいつは命令を聞いて、寒い中、木の陰でじ  
っとしているわけで……

ノゾミは俺に恩があるから従うと言っていたな。  
俺がノゾミにしてやったことって、何だったんだろ……  
ノゾミも覚えていないとか言ってたな。  
覚えていないのに恩返しに来た。  
そして俺も覚えていない。  
もしかしたらノゾミにぶつかって忘れてしまったのかもしれない。

いったい俺は、ノゾミに何をしてやったんだろうか。  
わからない。小さい頃、ノゾミに会ったという。  
そしてノゾミは恩返しに来るほどの恩を受けたという。  
そしてなんでも望みを叶えるという。  
俺はノゾミに何を望めばいいんだろ……

ぶはっ。

再び頭を上げ、冷たい空気を吸い込む。  
目に入ってくる滴を払い、髪から流れ落ちてくる水気を切りながら、考える。

湯から上がったら、あいつにも入らせてやろう……

そんな事を考えていると、頭に暖かいものが注がれてきた。

「キミヤ様、こうすれば楽ですよ」

頭に暖かい湯が注がれる。ノゾミが入ってきて湯をかけてくれているのか。

「ああ……ありがと」

目に流れ込んでくる湯を手で遮りながら、ちらっと視線をあげようとする、肌色のものが視界に入った。

脚か、と思ったら、へそがあった。腹だった。

……視線を水面に落とすと、落ちる水滴が波紋を作り、水面をかき乱しているため何も見えない。

意を決して頭を上げると、頭に注がれる湯が止まる。

両手で目に流れてくる水気をかきとり、目を開くと、ノゾミがいた。

ボウルを手にたノゾミが居た。

まっ裸だった。

「おまっ！」

ノゾミも服を脱いで入浴していた。

「なんで入ってきてんだ！」

「キミヤさまが苦しそうにしていたので、覗いてみたら潜っていたので、お湯をかけて差し上げようかなって」

「それに、体を洗ったら水が血で汚れるので、それもきれいにしないとイケないと思って」

ボウルを泉に浸しながらのほほんと答える。

「さあキミヤさま、お水をきれいにしないと」

そういうとノゾミはボウルを泉の中で揺らし始めた。

「なんで全裸になる必要があるんだ！そんなに深くないんだからスカートだけまくりあげて入れればいいだろ！」

「はい、最初は服を着たまま入ったんですが、服が水を吸って動きにくくなったので脱ぎました。服って毛皮と違って脱ぐことができて便利ですね♪」

ああ、こいつは犬だから服を濡らすとか汚すという事の意味がわからないんだっ  
たな……

それに、泉の水が血で汚れて、きれいにすすがないと汚れたまま出る事になるのも  
事実だ……

「じゃああっちむいてろ、俺もあっちを向いてやるから」

「ボウルの中を見ながらじゃないときれいにできませんよ？」

「じゃあ俺がやるからボウルを貸してくれ」

「はい」

ノゾミからボウルを受け取ると、ノゾミに背を向けてボウルを泉に浸し、中にある  
水をきれいにすることを念じながら。

「ふえろ～きれいになれ～♪ふえろ～きれいになれ～♪」

と、揺らしてみる。

こうやって水を増やしながらかれいにしていけば、この泉の水もすぐにきれいにな  
るだろ。

そう考えながらボウルを振っていても中の水は赤いまま。

もしかして、と思いボウルを泉から出し、水を5分目まで入れて泉の上で同じよう  
に――

「ふえろ～きれいになれ～♪ふえろ～きれいになれ～♪」

と揺らしたものの、増えもしなければきれいにもならない。

このボウルはノゾミが持っていなければ使えないものなのか。

仕方がない、さっさと泉の水をきれいにして、体を流してから出るか。

振り向くとノゾミが首まで泉に浸かってびばのんと温泉を堪能していた。

この狭い泉の中で、俺が振り向いていることにも気づかないくらいに。

「ノゾミ、俺じゃきれいに出来ないみたいだから、お前がやってくれ」

「～♪はい～」

と俺の呼びかけにも上の空で答えるので――

ゴワン！

「わふ！」

ボウルで頭を小突いた。

「ひゃい！キミヤさま！なんでしょう？」

垂れていた耳をおったて驚きながら、我に帰るノゾミに、ボウルを突き出す。  
「俺じゃ水をきれいにできないみたいだからやっぱりお前にやってくれってことで」  
「はいー」

ノゾミはボウルを受け取ると、ボウルを泉に浸すと、湯の中で揺らし始めた。  
「さあキミヤさま、水がきれいになるように念じて下さい」  
「ああ……」

視線の先にはボウルがありー  
「ふえ～る ふえ～る きれいにな～れ♪」

水の中で揺れるボウルを見つめていると、視界の端で……おっぱいも揺れているわけ……

「ふえ～る ふえ～る きれいにな～れ♪」

水に濡れた髪が張り付いて隠れているものの、湯の中で揺れる髪の間隙からのぞくものが気になって……

「ノゾミ……」

「ふえ～、なんですか？」

「……片手で胸を隠すなりしてくれないか？」

「片手だと揺らしにくいですよ？」

「胸が気になって仕方ないから」

「なぜですか？」

「なぜって……」

なぜと言われても俺もなぜなんだぜ。俺の好みが微乳だとしても……やっぱり目の前にモノがあると気になるわけで……いくら犬といっても……女の娘の姿で目の前に居ると……

「羞恥心というものを知らないのか？ 恥ずかしいって言う……」

「しゅうち……しん？ そんな神様がいるんですか？」

「羞恥心という神様は居ないけれど、裸になる事を禁止した神様がいるんだよ。だから人間は服を着てるんだ」

まあ俺もよくは知らないんだけど。

確か食べてはいけない木の実を食べたから服を着るようになったとかどうとか……

「キミヤさまは脱いでますよ？」

「これは風呂に入る時だからいいんだ！ 風呂に入ると服が濡れるからな」

「私もお風呂に入るので脱ぎました♪」

ああ……服の問題じゃなかった……

「そうじゃなくて……人間は異性は、男と女が裸を見せあうことはおかしいんだよ！だから服を着て隠すんだ！」

「なぜ人間は裸を隠しあうんですか？」

話に興味を湧いたのか、どんどん前のめりになってくるノゾミ。顔が近い。

上目遣いにのぞき込んでくる視線から目をそらすため、視線を落とせば胸の谷間が寄せられていて、あわてて上を見ると日差しが目に突き刺さる。

仕方なく頭の上を見ていれば耳がびこびこ揺れていて、その間から背中と尻と、大きく揺れるしっぽが見える…

「ままならないからだ！」

顔を左に向けて横を向くと――

「まま……ならない？ってどういうことですか？」

ノゾミはさらに近づいてきて、興味しんしんの瞳で顔をのぞき込んでくる。俺の両足の間に割り込んで。

「いうことをきかなくなるってことなんだよ！」

そう、人間はままならないんだ。俺がいくら微乳趣味であっても、体が反応しちゃうんだよ！！

「いうことをきかなくなる？」

さらに顔を寄せてくるノゾミの手が、俺の足の付け根に乗せられる。ってそこは今まさしくいうことを聞かなくなっている場所で！

ノゾミの手がいうことを聞かなくなっているものに触れる。

「……？」

何かに気づいたノゾミ、のぞき込んできていた瞳が下を向く。

そして、その何かを確かめるかのように、まさぐり、握るなあああああああああああ！！！！

「やめろ――――！！！」

他人に自分の言うことを聞かないモノを握られている感触は……

「これは……」

「離せえええええええええええええええ！！！」

もう必死で手を払いのける！驚いたのか仰け反るノゾミ！驚いてるのはこっち

だよ！！

「いいからあっち向けーッ！」

「は……はい……」

素直に言うことを聞いて向こうを向くノゾミ、水を吸った髪がよじられる背中に張り付いていく。

その背中に飾られた真鍮色の髪は日差しで輝いていて……

丸まっていく背中は恥じらいを感じさせ……

突き出されてくる尻と、くるりと巻いた尻尾は恥じらいを感じさせ…  
…ナー—————イ！！！！

「どうぞ……キミヤさま」

「なっ！？」

尻をこちらに突き出し、伏せている……これは交尾のポーズ！！？

「人間の体だから、いつでも発情できるので交尾できますよ」

水面から突き出された尻の上で尻尾は丸まり、大事な所はギリギリ水面で、影になって、湯気が重なり、謎の光で隠れて見えない。これがアニメならBDでも謎のレーザービームが照射されてしまうポーズだった。

「待てーッ！尻を降ろせ~~~~！」

命令すると、ノゾミは尻を下ろして湯に浸かり、、背を向けたままこちらを振り向いた。

見返りというやつだ。

それでも湯から出ている尻尾はしっぽはくるんと丸まったまま揺れている。

湯船から出ている尻尾は濡れていながらも、ハリのある毛ははりつくことなく、もふとした立体感を保っている。あのしっぽの毛は固いだろうか、それとも柔らかかったりするのだろうか。

でっかいネズミの……カピバラだっけか、あれは実際触るとたわしみみたいな感触らしいけど、こいつのしっぽは…… どんな感触なんだろう……

くるりとまるまったまま、左右にゆっくりと揺れるしっぽを……

掴んで……

腰をトントンした……

いああああああああああああああああああああ！！

「しっぽを動かすの禁止！」

危ない危ない、間一髪だった……

「そんな～、しっぽは自分では止められないのです」

困った顔をしてダメだ！

「しっぽも隠すんだ、手で押さえるなりして」

左右にゆれるもふっとしたしっぽ。これほど恐ろしいものはない。

「はい～」

いわれるままに、背を向けたまま尻尾を両手で押さえるノゾミ。

危なくしっぽに釣られて掴んでしまう所だった。危ない危ない。しっぽの魔力おそるべし。

額の汗を拭い、目線に戻すと、背中やしっぽを両手で押さえたままノゾミがこちらを向いていた。

「人間は向かい合って後尾するんですね……」

両腕を後ろに回し、胸を開き、受け入れるかのように湯船の中で横になろうとするノゾミ。

体が横たわっていくにつれ、胸の膨らみは体からこぼれるかのように、左右に分かれていく。

個体じゃない……液体なのか？

胸の上を滑り、左右にこぼれ落ちそうになりながらも、卵の黄身のようにその形を保っている。

柔らかいのか、弾力があるのか、服の上からだに抵抗もなく沈んでいった。

直に触れば……手が溶けてしま……

ああああああああああああああああああああ！！！！

「あっちを向いたままだー！背を向けるんだ！尻も湯に浸けて隠すんだー！！！」

「わうー」

しょんぼりとしながらも従うノゾミ。

尻も湯船に浸座り込んだため隠れて、尻尾も動かないように両腕で押さえられる。



これで一安心……と思っても――。

呼吸の度に……

身をよじる度にうねる、濡れた髪のはりついた背中……

目を捕らえて……

「これでは交尾できませんよ？」

「せんでいい！」

すかさず否定する。否定しなければ――

見返りながら、残念そうに耳を伏せてこちらを見つめるノゾミの、その上気した表情は……エロくて……

緑色の目に見つめられて居るだけで、ふらふらと吸い寄せられそうで、視線を外す。

「キミヤさまは私と交尾したかったんじゃないですか？」

体は反応してしまっているがそうじゃない！

「違う！逆だ！！恥ずかしいからやめてくれ！！！」

「でも、キミヤさまは交尾の準備をしているじゃないですか」

ノゾミの視線が湯の中のモノに向けられるのを察して、とっさに手で隠す。

「人間は思い通りにならないものなんだよ！」

そう、望んでいてもいなくても、目の前にあつたら釣られてしまうのが人の S a G a なのだ……。

「交尾したいのにしないんですか？」

「交尾したくないのにこうなるの！」

困り顔で疑問のまなざしを向けてくるノゾミ。

「人間は体が動いていても、それが頭で考えて居ることが違うんだよ！」

そう、人間の……オスの…… S a G a なんだ……

「したくないと考えているのに体はしたがる……よくわかりません」

動物は望んだら体が動くからそれで良いんだろうが、人間はそうはいかない。

「お前だって、したら痛い目をみるとわかっていたらしないだろ？」

動物だって食べたいものがあるとしても、それが畏だとわかっていたら、賢い動物なら警戒するなりする……

「私はキミヤさまを傷つけたりしませんよ？恩返しをするためにここにいるのですから」

確かにそうだ……こいつは恩返しにきているわけで、傷つけ……頭割られたな……

ノゾミ自身は恩返しにきているんだろうが……俺の本能が、微乳主義が、望まないものである巨乳を、体のいうままにホイホイ受け入れてしまうことは危険だと！

「俺は、微乳が好きだからだッ！！」

「び……にゅう？」

「ちいさいおっぱいということだ」

ノゾミは体を起こすと、自分の胸を確かめるように揉む。

「キミヤさまはちいさなおっぱいが好きだから、わたしの大きなおっぱいが嫌いで、だから私と交尾してくれないんですね……」

耳も尻尾も伏せてしまい、悲しそうな顔になるノゾミ。

「嫌いとかじゃなくてだな……」

違う、俺が願ってないのに望ませるから……そうか！

「そうじゃない、俺が言っているのは望んで無いのに体が欲しがらせる、だから相手に裸を見せたらダメなんだよ！

「体が欲しいと思うのはダメなんですか？欲しいと思ってるのに欲しくないんですか？」

ノゾミは犬だから望むという考えると体も望み通りに動くのが当然なんだろうが…

…

「そうだ、人間は望んでないのに望ませる、それが誘うってことで、ダメな事なんだ！」

「それは相手を自分の言いなりにすることと同じ、つまり命令しているって事なんだ。だから相手を自分の思いのままにするために……そう、誘うために裸を見せるのは、ダメなんだよ！」

「そして、相手の言いなりにならないためにも、誘われないために自分の裸は隠すんだ！」

よくわからなそうな顔をしているノゾミに続ける――

「要するにだ、相手に裸を見せる、誘うってのは、相手の思い通りになるってことと、相手に思い通りになれって事で、二つの意味で命令する事なんだよ」

「はい、私はキミヤさまの思うままですよ？」

そうだ……これが俺の感じていた違和感だったんだ。

「それが命令するって事なんだ！俺はお前に願い事をする側だろ？お前が願い事をしてどうするんだ。お前は願いを叶える側なんだから俺の願いを聞かなくちゃいけないだろ？」

困った顔で空を見上げるノゾミ。

しばらく間を置いて、再びこちらに視線を戻すと――

「じゃあ……キミヤさまの体は交尾したいとっていても、キミヤさまが口で「交尾したい！」って言わないと交尾しちゃダメなんですか？」

「まあ大体そういうことだ……俺が口に出して命令していない事は望んでない事だから、しちゃだめだぞ」

「はいー」

困った顔をしているノゾミ。

ここまで言っててなんだが、自分もなんだか複雑だ。

ノゾミは俺のためにしてくれたわけなんだから、こうして怒るのは何か違うんじゃないかと感じる。

けれど、ここでノゾミに自由にさせたら、俺はノゾミのために何かしら望まなければならなくなる気がする。

それは恩返しとは違うんじゃないか……？

俺も正直な所よくわからん。

ただ、好意であれ、相手に何かをするとか誘うってのは、相手になにかしろと命令するのと同じってことだけはわかったような気がする。

そして、ノゾミは俺の望みをなんでも叶えようとする事と、俺が命令しなければノゾミの思い通りにされてしまう事も。

そうさせないためには、命令したり、叱ったりと、しつけなければならないということも。

他人に命令しなければ、自分が命令されてしまう。

ああ……だから俺は、控えめな微乳が好きなんだな……と、微乳の真理に気づいたのだった。

温泉から出た俺はきれいになった服を着て、砂利と落ち葉が撒き散らされた、雑草が吹き出す割れたアスファルトの酷道を再び下っていた。

「～♪」

後ろからは呼吸だけで楽しそうにしているのが伝わってくるくらい楽しそうにしているノゾミがついてきている。

横に居たら顔をのぞき込んできてうっとおしいので、後ろについてくるように言ったら、これはこれで気になってしょうがない。

今にも後ろから飛びかかってくるんじゃないか、と。

ノゾミは俺がして欲しいと思った事をすぐさまやろうとする。

考えてない事でも、してこようとするのだから困る。

そうならないためには『やるな』と命令しなければいけない。

まったく、ノゾミは自分の思い通りにはいかないもんだ。

願い事を叶えにきたのに、自分の好みの微乳ではなく巨乳として現れた時点でなんか違うしな。

.....もし、ノゾミが自分の望む姿.....微乳少女としてこいつが現れていたら。

俺はこいつのやることを、すべて受け入れて.....

なんてことを考えながら歩いていると、目の前にロープが張られている事に気づいた。

そのすぐ先は開けた場所になっている。

そこは大きな公園のようで、遊具らしきものはなく、一面が芝生に覆われている。

公園と酷道は木の柵で仕切られた遊歩道らしきもので仕切られ、遊歩道と酷道との間はロープで区切られている。

どうやら酷道に車が入らないようにするためのものらしい。というか廃墟といっても私有地だから、人が入らないようにもしていたんだろう。

といってもボロボロで、今にも切れてしまいそうなロープをまたいでいく。

遊歩道のコンクリでできた階段を降りて、芝生を踏みしめる。冬だからか枯れていて、ガサガサという感触がする

さて、

と、後ろからノゾミが飛び出してきた！

走る！

走る！走る！走る！走る！走る！走る！走る！

転んだ。

起き上がり……

走る！

開けた場所に出たためか、ノゾミは全力疾走していた。

原っぱを駆け回る女の娘……口を大きく開けて息をしながら、笑顔で全力疾走する姿は、

犬が駆け回っているみたいだ。

犬だったな。

方向転換しこちらに向かって走ってくると、急ブレーキして目の前で止まった。

「キミヤさま！おなかが空きました！」

そういえば、ビルの上で肉まんを食べたとはいえ、温泉に浸かったり、山道をずっと歩いてきたりしてたから俺も腹減ったなあ。

それにノゾミは何も食べていなかったな……。

「そうだな、肉まんでも食べるか」

まだ半乾きの頭をかいて、向こう側にあるベンチを目指し歩きだす。

ノゾミは向かう先がベンチだと気づいて、一人ベンチまで走っていった。

「ふえ～る♪ふえ～る♪あたたま～る♪」

タマフリ・ボウルを使い、冷たい肉まんを増やして暖める。

どれが本物かわからないぐらいに精巧に、増えた肉まん。

しかし、本物の肉まんが増やした肉まんの違いは簡単にわかる。

増やした肉まんはボウルの力で暖める事ができる。けれど、元からある肉まんは暖まらないため温度でわかる。

そうだ！暖めるだけでなくおいしくすることはできないのだろうか？

モノは試した、やってみよう。

「ノゾミ、肉まんをおいしくすることはできないのか？」

「おいしく……おいしいってどんなものなんですか？」

「そうだなあ……」

『おいしい』といっても、甘いとか、辛いとか、しょっぱいとか、すっぱいとか、苦いとかだけでなく、カリカリとしてたり、パリパリしてたり、もっちもっちしてたり、トロトロしていたりするもんだ。

「そのキミヤさまがおいしいと思う肉まんになるように念じてください」

おいしい肉まん……といったらいつもの100円の安い肉まんではなく、130円くらいする高い肉まん。

あんな感じの……

生地がふわっともちっと、固い部分と柔らかい部分で違いがあって、白菜やタマネギがちゃんと歯ごたえがあって、肉も粒感があって、汁気もある。

肉団子みたいなのが空洞の中にぽつんと入ってるだけのものじゃない、そんなおいしい肉まんを……

「よし！」

俺の望む肉まんは決まった！

「固くて柔らかい生地！ジューシーな肉！シャキシャキした甘い白菜にタマネギ！になれ～」

130円くらいの高い肉まんになるように想像しながら、ボウルの中の肉まんを見つめる。

と、まるっこくてつるつるしている肉まんが次第に姿を変えていき、つまんでねじったような山になっている肉まんに姿を変えていった。

「できました！」

なんてことを考えているうちに、肉まんは山盛りに増えていた。

ボウルの中でこんもりと盛られた肉まんが、ほかほかと湯気を立てている。

「じゃ、食べるか」

「はい♪」

肉まんは出来立てのようにほかほかと湯気を立て、柔らかな生地を手で割くと、中からは汁が滴りそうな具が出てきた。

口に入れると具のそれぞれの歯ごたえが違い、野菜からは甘い汁が、肉からはうま味が染み出してきて、それらが婚前となって口の中にあふれてくる。

それをただの小麦の生地じゃない、固さと柔らかさのグラデーションを持った生地が受け止め、きちんと発酵された小麦のうま味と相まって、噛むごとに体にウマさが流れ込んでくる。

「これが本物の肉まんなんだなあ……」

といっても本物の肉まんを食べたことあったっけな、中華の店とかで作っているような奴。

そんな記憶は無いのでたぶん食べたことは無いんだろうけど。

「ご主人様の肉まん、おいしいです♪」

ノゾミも喜んでいるようだし、これでいいか。

「にゃー」

と、肉まんを食べていると、足下に一匹の黒猫が寄ってきていた。

肉まんのにおいにつられたのか、足に擦りついてくる。

首輪がついていないから野良だろうか？

けれど、人に慣れているのか、足に擦りつきながら、足の周りをぐるぐるとまわり、にゃーと鳴いて金色の眼でこちらを見つめてくる。

その黒猫の体は、ボサボサとした真っ黒な毛並み越しにもわかるほど痩せている。

ノラネコというものは大抵、人間に餌をもらって生活しているわけで、こんな山の中の公園にも人は来ていたんだらう。

けれど、これだけ痩せているということは人も来ないのか、来ていたけど来なくなったのか。

山の中だから餌はネズミとかあるだらう。

けれど、こんな冬じゃ餌になる動物も居ないだらうし、人に餌を与えられて生きてきた猫にとって、一人で生きた獲物を狩って食べるという事は難しいんだらうか。

.....こんなに懐いてるんだし、餌をやるか。

かわいそうだしな。

手にしている肉まんをちぎり、ネコの鼻先に差し出す。

ネコは差し出された肉まんを嗅ぐと、手に擦りついてきた。

「食べないのか？.....そうか」

ノゾミのボウルに入っている冷たい肉まんを取り出すと、半分にちぎってネコに与えた。

ネコは手に持っている冷めた肉まんの具をかつかつとおいしそうに食べつくすと、指についている分までざりざりと嘗めとった。

まだ足りないみたいなので、残りも差し出すと、肉まんの皮ごと残さず食べきった。

。

そのネコの鼻を指で撫でてやると、目を閉じる。

そのまま眉間、頭をなでてやると、その頭を手押しつけてくる。

ネコというのは耳の裏とノドが気持ちいいんだっただな。

そんなことを思い出すと、ネコの耳の裏を、首を摘むように親指と中指で搔いてやり、ノドを手のひらで包むようにして、さすってやった。

すると、ノドを伸ばしてさすっている手に体重を預け、気持ちよさそうに目を閉じ、ゴロゴロと喉を鳴らし始めた。

こうして喜んでいる姿を見るのは和むもんだ。

「キミヤさま！私も撫でてください！！」

と、猫を撫でるのに夢中になっていてすっかり忘れてたけど、ノゾミが居たんだっただ。

ノゾミは緑色の眼で、身を屈めて猫を撫でている俺の顔を、同じように身を屈めて覗き込んできている

「撫でてくれ、といわれてもな……」

体を起こし、ノゾミを見る……

ノゾミは……真鍮色のウェーブのかかった髪の中の娘だ……

イヌミミの生えた。

……こいつは犬なわけで、撫でてやるのは普通なことだけれど……

女の娘の姿をしている。

と……抵抗感がある。

女の娘を撫でる。ってのは相手に触れるわけで——恥ずかしい。

普通は女の娘の髪を触るなんて、相手にとっても深い意味とか持ってるわけで……

それを撫でてくれと要求されるのも……

「ごほうびのなでなでください！」

ご褒美……そういやこいつは頭を木っ端みじんにしたといっても、その後頭を治してくれたし。

泉を温泉に変えてくれたし、こうして肉まんを増やしてくれるし、やりすぎるとはいえ俺のためにいろいろしてくれているわけだ……

俺の願いを叶えに来てくれたといっても、ただ願い事を叶えてもらうだけってのもなんだな……

体を起こすと、身を屈めたままのノゾミを見る。

ノゾミは上目遣いに、こちらを見つめている。



「じゃあ……」

その頭に手を乗せ、撫でる。

「わふ……」

ノゾミは目を細め、気持ちよさそうに顔を緩める。

頭を撫でるごとに、手のひらにノゾミの髪の毛の感触が伝わってくる。

さっきの黒猫とは違い、引っかかるものがないするりとした波打つ毛束が、真鍮色の流れの中に虹の波を作り、手のひらに心地よい感触を返してくる。

撫でているだけでも心地よくて……髪の中に指を潜らせ、すいてみる。

指に絡みつきながらも、引っかかることの無い。そんな相反するかののような感触は、まるで指を包みこむようで……そのまま髪の流れにそって指を滑らせると、かすかなかき分けるような感触と共にするするとほどけていく。

その感触に浸っていると、手が止まる。

自分の腕には伸ばせる限界があるから。

腰まであるノゾミの髪をすく事はできないので、指を髪から抜きだす。

その指に絡みつきながらも、指から離れた髪は、流れる川に落ちた水のように、流れの一つに還った。

「んう……」

ノゾミの耳が、ピクリと震える。

撫でられるのが気持ちいいのか、目を細めたまま、唇から、舌の先がちらりと覗かせながら惚けている。

視線に気づいたのか、視点の定まらない眼でこちらを見つめてくる

「もっと……」

その言葉に、再び手をノゾミの頭に置くと、髪を撫でてやる。

再び顔を伏せて目を細めるノゾミ。

髪を撫でられる事は、気持ちいいらしい。

撫でているこっちも気持ちがいい。

こうして頭を撫でるたびに気持ちよさそうに、目を細めたまましっぽをゆったりと大きく揺らす。

「わふ～」

ただ撫でているだけ、それだけで、これだけ喜ぶ……

撫でられるって、そんなに気持ちのいいものなのだろうか……。

撫でているこっちも気持ちが良いんだし、気持ちいいんだろう。

ご褒美をもらえるからうれしいんだろうか……

いろいろと働いたご褒美だから、誉められたら気持ちいいよな。

そういえば……

こいつのやったことを誉めてやるのって、これが初めてだっけ……

そんな事を考えながら頭を撫でてやっていると、ノゾミが頭を持ち上げてくる。

もういいのか？と思い手を止めようとする、その手に頭をすり付けてきて、すり抜けたノゾミの頬に手が触れる

柔らかくて、手が沈み込みそうで、滑りながらも吸いつく肌の感触に、その頬を手のひらで包み込んでしまう。

ベンチの上で身を乗り出している女の娘の頬を、包むように手を添えて居る。

そんな状況で……

ノゾミの手が肩にかけられて……

おもわずのけぞると、そのまま押し倒されてしまった！

「こっくらっ！やめろ！！」

ノゾミは胸に頭をすり付けてくる。

顔を覗き込んでくるノゾミ。

その細めたままの瞳は緩んで、黄緑色に輝いていて、半開きの口からだらしなく垂れ下がった舌から、唾液がしたたり落ちてくる。

生暖かい滴が頬をつたう。

このままじゃ……食われる！俺の貞操が！！

いや、顔を舐められるくらいなんだ、こいつは犬なんだから、仮に唇に触れたとしてもそれは事故のようなもので、でもこいつは人間と同じ姿で、さっき泉では交尾とか言い出したし！

やっぱりこのままキスされてなし崩しに俺は食べられてしまうのか！性的な意味で！！

なんとかしなければ！なんとかする！？

このまましてしまっても何が変わるわけでもないし！

交尾したからといって実際食べられてしまうとかそういうわけでも無いだろうし！

！

恩返しに来たっていうんだから体で恩返しとかそういうことで！！！！

このままコイツと交尾しても……

このままコイツと交尾したら？

惚けた顔で見つめてくるノゾミの眼、深い緑の瞳は緩み、その真中の黒い瞳孔を金色の光のような虹彩が縁取っていて、それはさながら日食の時に出来る太陽の輪のように輝きながら、その奥に俺を映している……。

その瞳が、逸れた。

釣られてその方向に眼を向けると、赤いゴムボールが転がっていて、一人の子供が駆け寄ってくる。

側にいた黒猫は、いつのまにか居なくなっていた。

ボール……？

ノゾミの視線を追いかけ眼を向けると、そこには赤いゴムボールが転がっていて、その向こうから小学校に入るか入らないかくらいの男の子が駆け寄ってきていた。

ノゾミは俺にもたれ掛かっていた体を起こすと、目の前に転がってきたボールを拾い上げ、そのまま立ち尽くしている。

何を思っているのだろう。

その背中をベンチの上で身を起こしながら見ていると、子供がノゾミに近づいてきた。

ノゾミが身を屈めしばらくすると、子供は背を向けて走り去った。

ノゾミの体で隠れていてよくは見えなかったけれど、駆けていくその手には赤いゴムボールが握られているのが見えた。

……その光景を見ていて、何か言葉にならない違和感を感じる……。

そういえば、俺はノゾミに押し倒されていたわけで、はたから見たらイチャついているカップルにしか見えなかったのではないか……ってそうじゃない。

ノゾミは犬耳としっぽを生やしているわけで、人間じゃない。

……いや、まてよ？犬耳の飾りか何かだと思われたのだろうか、しっぽも生えているけれど、そういうコスプレみたいなもんだと。

まあそれはそれで、犬のコスプレした女の娘とベンチでイチャついていればそれはそれで恥ずかしい……。

「キミヤさま！」

さらに自分の名前を様づけで呼ばせているのだからもっと恥ずかしい……。

ご主人様でなくても恥ずかしいにも程があるだろ！

……いや、そうじゃない……そうだ。

ノゾミはモノを増やしたり変化させたりできて、犬耳としっぽが生えた女の娘で…

…

ノゾミは俺の幻覚でも夢でもなく……

今の子供にも見えていて……

ゴムボールを拾い、手渡していた。

……ノゾミは、実在している？

「キャッチボールをしましょう！」

ノゾミの言葉に我に返ると、目の前に捧げるように差し出されたその両手の中に、赤いゴムボールがあった。

「約束……ですよ♪」

そのノゾミの瞳はキラキラと金色に輝いて、俺を見つめていた。

子供のボールを拾った時に増やしていたようだ。

キャッチボールの約束……？

「キミヤさまと約束した事ですよ『いつか外に出て、一緒にキャッチボールをしよう』って」

覚えて無い……と言い出せない空気だ。

「その約束をのために、私は犬神になりました……」

眼を閉じて、思い返しながら語るその眼からは、涙が溢れ頬を伝っていく。

キャッチボール……

ノゾミの涙から、キャッチボールの約束が大切なものだということは伝わってくる

。

けれど、キャッチボールから思い出せるものが無い。

自分が頭をこっぴみじんにされた時に忘れてしまったのかわからないけれど、泣くほどやりたいってことなら……

ノゾミの捧げ持つ赤いボールを手に取り、  
「やるか……キャッチボール。約束なんだろう？」

その言葉に目を開き、うれしそうにこちらを見つめながら、  
「はい！」

と、耳をぴんと立て、ばふばふとしっぽを大きく振りながら応えた。

ボールを持って、ノゾミと距離を取る。

少し離れて……っと思って後ろを振り向くとすぐ目の前にノゾミが居て、期待を込めた眼差しで見つめてきている

「ノゾミ……」

「はい！」

「キャッチボールは離れないと出来ないんだ」

「なんでですか？」

「キャッチボールというのは、相手にボールを投げて、それをキャッチするというものなんだ」

「ボールを……キャッチ？」

「取るって事だ」

「それで、なんで離れる必要があるんですか？」

「ボールを投げるためだよ」

「投げる？」

投げるのがわからない……そういえばこいつは犬だったな。

「そう、こんなふうに……」

と、手にしているゴムボールを軽く投げる。

「そのボールが落ちた所に立って……」

と言うより早く、ノゾミはボールを追って走り出していて、地面に落下する寸前に飛びついて口で啜えてキャッチすると、全力で走って戻ってきて、口に啜えたままのボールを差し出してきた。

「ふあひ！ひひひやひやみや！」

「ボールを口でキャッチするんじゃないーい！！！」

再びボールを持ったままノゾミと距離を取る。

前回の失敗をふまえ、ノゾミにその場を動かないように命令してから。

とりあえず10歩くらい。だいたい5メートルくらいか？

今にも駆け出しそうに、しっぽをばさばさと大きく振りながら、言いつけどおりその場で待っているノゾミ。

「いくぞー！」

「はいー！」

手にしているボールを、投げる！

ボールは放物線を描き……

ノゾミが空中で啜えてキャッチ！

駆け寄ってきて……

「はい！キミヤさま！」

啜えていたボールを手の上に載せて、捧げるように差し出してきた。

どうしてこうなるんだ……

ノゾミは犬なわけで、犬は手を使う事が出来ないわけで、だからモノを投げることが出来ず、投げるという考えが出てこないのか？

なら……。

「いいか、ノゾミ。キャッチボールというのは、お互いにボールを投げ合うものなんだ。犬だった頃ならそれでもいいのかもしれないけど、人間は投げて渡すものなんだよ」

「投げる？」

「それに、受け取るのも口じゃなくて、手で取るものなんだ」

「手で？」

自分の手を見つめるノゾミ。

「こんなふうに、手に持って……」

地面に落ちている石ころを拾い、投げるしぐさをする。

振る手をじっと見つめて、いまにも飛びつきそうになりながら、緑色の瞳で見つめているノゾミ。

「こんな感じで」

そういいながら石をノゾミに手渡す。

ノゾミは石を受け取ると、投げる仕草を真似て、手を振ってみる。

石は地面に一直線に落ちていった。投げたというより落としたとかそんな感じで。

「投げるなら上手く手放さない」と

「はなす？」

「こんなふうに」

石を拾いあげ、アンダースローで腕を振り、勢いが一番乗っている所で手を話す。手から離れた石は放物線を描き、遠くへ飛んだ。

その飛んでいった石をノゾミは、今にも走って追いかけていきたそうに見つめている。

「ほら、やってみ」

ノゾミは石を受け取ると、見つめ、俺の真似をしてアンダースローで、投げる。石は放物線を描き、遠くへ飛んだ。

「そうそう、そんな感じで」

「はい！」

同じようにできて、誉められて嬉しそうに見つめてくる。

さっきのように飛びつかれても困るので離れていく。

「ほら、キャッチボール始めるぞ、追いかけてきたらダメだからな」

と、追いかけてこようとしていたノゾミに釘をさす。

さっきと同じくらい距離を取り、ゴムボールを持つと、こちらを見つめているノゾミに向かって――

アンダースローでボールを投げる！

高い放物線を描いたボールはノゾミの頭を越すと、地面に落ちた。

そのボールを困った様子で見つめているノゾミ。

「ボールを追いかけてもいいんだぞー！」

「はいっ！」

ノゾミはその言葉をまっていたとばかりにスタートダッシュを切り、全速力で転がっていったボールに飛びつき、手で捕ると、こちらに掲げて見せた。

「ちゃんと投げて返すんだぞー」

ノゾミは掲げていた手を下ろすと、アンダースローで投げ返してきた。

ボールは高い放物線を描き、こちらに飛んでくる。高く飛びすぎているのか頭上を越えるだろうボールを追いかけて後ろに走り、振り向いてボールをキャッチ！

しようとするも、掴み損ねる。

地面に落ちたボールは軽くバウンドし、止まった。

ノゾミにあれだけ言っておきながらキャッチ出来なかった事に気恥ずかしくなりな

がらもボールを拾いあげ、再びボールをアンダースローで投げ返す。

今度は距離が足りずにノゾミの手前に落ちる。そのボールを見つめ、自分の手前に転がってくるまで見つめているノゾミ。

「落ちた後なら近づいてもいいんだぞー」

そう指示してやると、目の前に転がっているボールに飛びつき拾い上げると、先ほどと同じようにボールを投げ返してきた。

今度は飛距離が足りないのか、手前に落ちたボールを捕ろうとするも、草の上でバウンドしたボールは予想外の動きをして、足の間を潜っていった。トンネルだ。

二度目のエラーに、これじゃ教えられる立場じゃないな。と考えながらボールを拾いあげて、ノゾミの方を向く。

ノゾミはまっすぐにこちらを見つめて、いつボールが飛んでくるのかとしっぽを大きく振りながら待っている。

再びアンダースローでボールを投げる。

今度はノゾミの手元に飛んでいったボール、そのボールを両手でキャッチしようとして掴み損ねる。

そのボールが胸に当たって、軽く弾んだ所を両手でしっかりと捕る。

地面に落とさず捕れた事が嬉しいのか、ボールを掲げた手を振るノゾミ。

こちら手も手を振って応えてやると、両手を挙げて手を振り返してくる。

その喜ぶ姿を見ていると、こちらも嬉しくなってくる。

こうしてボールを投げあっているだけなのに、楽しいもんだな。

ノゾミはどうなんだろう。

「どうだー？キャッチボール」

「楽しいですー！」

ただボールを投げては捕れなくて落として、ボールを上手く捕れたら喜んで、上手く投げれたこっちも嬉しくなる。結構おもしろいもんだな、キャッチボール。

「ボール！投げ返さないとー！」

と、言わないといつまでも手を振っていきそうだったノゾミは俺の言葉で我に返ると、再びアンダースローでボールを投げ返してきた。

ボールは急に拡大されたかのように！

「うおっと！」

とっさに避けると、ボールは頭のあった場所を通り抜け、低い弾道を描いて地面に



落ちた。

危ないところだった。といってもゴムボールだからぶつかったとしても痛くもないんだけど。

と、地面を転がっていったボールに駆け寄り拾い上げる。

結構転がったな。

ノゾミのとの距離は、だいたい20メートルくらいになっていた。

なら……と、ボールをオーバースローでおもいきり投げる。

ボールは勢いよく弾道を描いて飛ぶと、ノゾミはそれを両手でキャッチした。

「キミヤさまー！」

上手く手だけで取れたのが嬉しいのかさっきよりもしっぽを激しく振っている。

こうしてキャッチボールで遊んで楽しい……

ノゾミは俺の望む姿じゃない。けれど、こいつは俺のためにいろいろしてくれて、誉めてやれば喜んでくれるわけで……

ノゾミでも……いいんじゃないか？

そんなことを考えながらノゾミを見つめていると、ノゾミは俺のマネをしてオーバースローでボールを投げてきた。

突風が吹いて思わず目を閉じる。

あれ、ボールはどこへいった？と後ろを向くと、森の木の枝がパキパキと音を立てながら落ちていた。

ボールを飛ばしすぎたか？

右耳がなんだか耳鳴りがする。

「キミヤさまー！」

ノゾミの呼ぶ声に我に返ると、森に駆け寄るも、ボールは見あたらない。どこまで入っていったんだ。

木の枝が落ちている場所を探しても見つからない。もしかしてボールは木の上に引っかかっているのか？

そうして森の手前でボールを探していると、ノゾミが駆け寄ってきた。

「キミヤさま？」

心配そうに見つめてくるノゾミに、

「ボールが見つからない……」

と言うと、

「私が見つめてきますね！」

と言うより早く、森の中に入っていった。

そんなノゾミの姿が見えなくなり、しばらく待つ。

しかし、帰ってくる気配も無く、途方に暮れていてもどうしようもない。

「ノゾミー！」

と、森の中に呼びかけても、帰ってくる木霊も無く。

どうしたものかと考えながらも、森の中に入ると迷いそうなので整備されている遊歩道を歩き、森の奥へと入っていく事にした。

肉まんの入った袋を持って、遊歩道を歩きながら、ノゾミの行っていった森の中を眺める。

しかし、ノゾミの姿は無く、ただ木がざわめいているだけ。

枯れ木ばかりの冬の森を、木枯らしが揺らしざわめかせる。

誰も居ない。はずなのに何か居るようなように感じる、そんな森の中を迷わないように遊歩道という整備された道を進む。

「ノゾミー！」

呼びかけても返事はない。

ノゾミのやつ……どこまでいったんだ？

ノゾミが帰ってくる気配が無い

ノゾミの行っていった方向と合ってるはずだけど、これは森の中に入って追いかければ良かったか……。

あいつの鼻は水が森の中の泉がどこにあるかわかるくらいで、それならボールを探し出すくらいわけないはず。

それでもノゾミが帰ってこないということは、ボールは相当奥深くまで転がっていったのか、それとも迷っているのか。

犬というのは勝手に走り回ったりするらしい。鎖が取れたとたん思いっきり走り出して帰ってこなくなるとか。

それを考えると、もう帰ってこないんじゃないだろうか？

あいつのことをかわいいと思えてきたのに……そんなことは無いよな……。

足が止まり、森の中を見つめる。

遊歩道と森を仕切る鉄の杭とチェーン、その奥に広がる森は急な斜面で、歩いて進

むには苦勞しそうだ。

あいつは森の中に入っていったのであって、こうして遊歩道を歩いて追いかけてもあいつと離れていっているんじゃないだろうか。

あいつが迷っているなら、こっちから探しに行かないとな。

決意し、手をふさぐ肉まんの入った袋を腰のベルトループにくくりつけ、木を伝い森に足を踏み入れていった。

木に遮られた斜面を登りながら思う。

俺の好みとは違ったけど、おおむねアリだし。

ノゾミと一緒に暮らして行く事になったらどうなるのか……。

このまま記憶が戻らなければ、とりあえずさっきの廃墟にでも住めばいいか。

着る物はノゾミに増やしてもらったこの服の姿を変えればいいし、食べ物も同じようにノゾミに肉まんを増やしてもらえばどうとでもなる。廃墟もノゾミの力できれいにすればいいか。

……一緒に暮らすとなったら、朝、雀の鳴き声で目が覚めたら、隣にYシャツ一枚のノゾミが寢息を立てていたり、エプロン姿でご飯を作っていたり……というよりあれば増やすか。風呂は……さっきのように一緒に入って。夜とか一緒に寝たりするわけで……。

そこからいろいろとあって子供が出来たりして、その子供と一緒にキャッチボールを……

うおわ—————！！！！？

突然！後ろ足に何かが巻き付いて凄い力で引っ張った！

浮き上がった体は木の枝にぶつかり体をひっかかれ、森を抜けたと思ったら空で！体は浮き上がりどちらが上でどちらが下かわからなくなるくらいグルグルとまわりながら、どこかへ引っばられていく！

何が一体どうなってんだ！！！！

……気がつくのと、足下に空が見える。

頭が重い、逆さまになっているのか？

左足首には何かが巻き付いていて、俺は吊られているようだ。

どうしてこうなった？

そういえば……森を歩いていたら足に何か巻き付いて、引っ張られて空飛んで、落っこちる時に気を失ったのか……。

頭の上、というか下からは、何か水の流れる音がして、

そんな俺を、日を背にして大きな岩の上に立つ、銀色に光る影が見下ろしている。

「やあ、おにいちゃん♪」

その声は女の子のもので、目を凝らしてみると、裾の長い黒っぽいコートのようなものを着た少女が立っていた。

ウインクしているその瞳は深い青色をしていて、銀色に輝く長い髪が風になびいている。

その手には黒くて、釣り竿と呼ぶには太い、物干し竿くらいありそうな太さの釣り竿らしきものが握られていた。

俺は釣られていたわけだ。

「危ないところだったね。でも、もう大丈夫だよ」

「今まさに危ない所なんだけど！」

そんな俺の言葉を華麗にスルーしつつ――

「かわいそうなおにいちゃん♪」

哀れみの言葉をかけてきた。

ウインクをしたままの片目で見つめながら。

自由を奪われ逆さまに吊られた状態で、足下に見える空から見下ろしている少女を見下ろす。

「おにいちゃん、見たところまだまだ若いんだし自殺なんて考えちゃいけないよ。生きていだけでも、幸せになるチャンスは巡ってくるんだから」

逆さまの少女は青い目で見下ろしながら、俺が自殺するとかしないとかわけのわからんことを言っている。

「俺がなんで自殺しなけりゃ……りゃ……りゃ～～～ツクション！！！」

なんだかやたらと冷える。と思ったら、上半身まっ裸だった。

川の上に吊り下げられているから寒いのかと思っていたけど、なんだか肌を刺すように寒いと思ったら、上半身真っ裸だよ！

「だめだよおにいちゃん、こんな真冬に山の中でまっ裸でいたら、自殺する前に凍えて死んじゃうよ？」

「裸になったのはお前が原因だろうが！」

「私が？」

「そうだ！お前が釣り上げた時に木に引っかかって脱げたんだよ！」

そう、森の木々に引っかかかれている時に足を引っ張られていたから、上半身の服が木に引っかかって脱げたんだ！

「やっちゃった？」

舌を出しながらウインクする。かわいい仕草も逆さ吊りにされて寒さと頭へ血が上っている現状ではイラッとくるぜ。

「じゃあ、おにいちゃんはなんで真冬の森の中に居たのさ、遊歩道から外れて森の中に入っていくなんて自殺行為だよ？」

それは常識的に考えればもっともだ……けれどそれはノゾミを探していたわけで…  
…

「彼女を探してたんだよ」

その言葉に逆さまな少女の目が白くなる。

「……おにいちゃん、森の中にかわいい彼女は居ないんだよ。居るのは熊とかイノシシとかで、何かが居るように感じるのは森の木がざわめいているだけなんだから」

「さっきまであっちの公園でキャッチボールをしてたんだよ！それでボールが森に入っていったからそれを追いかけて森に入って行って、戻ってこないから探しに入っていたんだよ！」

「おにいちゃんの彼女さんは森の熊さんなんだ……」

聞いちゃ居ない。

「それが本当なら、彼女さんは迷っているんだから、電話でもかけてあげるとかしてみたらどうかな？」

「電話？……ああ、携帯か！」

「ここは電波が来てるよ」

言われて気がついたふりをするも、電話は電池切れで使えない。ノゾミの力で増やして充電された状態の携帯を出そうとしてもうまくいかなかったし……。

そもそもノゾミが増やしたのは俺の携帯だから、自分の携帯に電話をかけてもでられないんじゃ……。

「いま携帯の電池が切れていて連絡が取れないんだ」

「森の中で迷っているのに連絡が取れないのに、同じように携帯で連絡が取れないおにいちやんまで森に入っていったら二重遭難になっちゃうよ」

確かに、常識的に考えれば連絡出来る手段も無いのに迷った相手を捜しに森に入ったら二重遭難するよな。

でもノゾミは犬神で、神様っぽい嗅覚で俺を探し出せるわけで……

「俺の携帯は電池切れてて連絡できないんだ」

電話なんていらんだけどな。

「だったら私が充電してあげるよ」

「できるの？」

「予備バッテリーを持ってるからね。山の中で携帯の電池が切れたら大変だからね」

というと、少女は空いている手でポケットを探ると、なにやら白くて四角い物を取り出した。確かあれはけい……帯とかを充でんできるっているばってりーか……

うう……。

「そのまえに……おろして……あたまが……」

「かゆ？」

「うま……」

と言った瞬間、体がガクンと下がり、髪の毛が水面に触れた

「ポケたのはそっちだろ！」

「ノッてきたのはおにいちやんじゃない。うーん、自由にしたら襲いかかってくるかな～」

というと、竿を揺らしたのか、吊られている俺は水面の上をクルクルと回され、視界は水平方向に溶けて混ざっていく。

「う～あ～～～」

と、振り回されてゾンビみたいな声を上げてしまう。

「うーん、降ろしたら嘔みついてきそうだなあ」

「わーかーっーたー！ゾーンビーのー真ー似ーとーかーしーなーい  
ーかーらー！」

どちらに居るのかわからない少女にぐるぐると回りながらゾンビの真似をしないと誓うと、

「ま、いっか」

と、少女が軽いノリで承諾しすると、に体がゆっくりと一方向に大きく動いているのが伝わってきて、吊り下げられている俺はそのまま水面スレスレを振り回される！

目と鼻の先を水面と岸辺の石がかすめていく光景に思わず自由な手で頭を必死に抱えて目を閉じる。

体を丸めて石にぶつからないように頭を抱え目を閉じていると動きが止まり、頭を抱えていた腕が冷たくゴツゴツした石に触れて、そのまま背中からゆっくりと降ろされた。

丸めていた体の力を緩め、頭を抱えていた腕をほどくと、視界には灰色の空が見える。

ようやく地面に着いたと体の力を抜き、曇り空とはいえまぶしい空に目を腕で覆っていると、ふいに左足を掴まれる。

クラクラと揺れる頭で何事かと思っていると足下からブツツという鈍い音がして、手が離れる感触と再び掴まれる感触が繰り返されると、足が地面に下ろされた。

「はい、針を外して絡まっていた糸を解いたよ」

その言葉に、左足を動かして自由の感触を味わう。ジーンズ越しとはいえ釣り糸でグルグル巻きにされた左足はまだ痛い。

「蜘蛛の糸から逃げられた蝶の気分だ」

そんなことを呟きながら、テレビか何かで見た記憶がある、捨てられた釣り針のついた糸に絡まって飛べなくなって死んでいく野鳥の気持ちが良くわかった。なんてことを考えていると、

「おにいちゃんじゃ蠅だね」

と、青空のような声でツッコまれた。